

抄 録 集

9
Sep.



一般社団法人 日本動物看護学会



ペットを愛するすべての人に、最良の動物医療を。

VCA Japan は、日本一の獣医療サービスを提供することを目指しています。

私たちは、ペットが私たちの暮らしを豊かにしてくれることを深く理解しています。

そして、ペットが健康で幸せに暮らせる世界 (A Better World For Pets) を創りたいと願っています。

私たちのミッションは、動物の健康を最優先に考え、高品質な獣医療サービスを提供することです。

そして、その実現のために、獣医療従事者のキャリア開発や福利厚生に積極的に投資しています。



VCA Japan 動物病院グループ

〒108-0075 東京都港区港南 1-2-70 品川シーズンテラス 7階
TEL: 03-5953-1308 URL: <https://www.vcajapan.com/>

MARS
Veterinary Health



VCA Japanでは
獣医師と愛玩動物看護師を
募集しています

一般社団法人 日本動物看護学会
第 35 回大会
抄録集

開催日：2026 年 9 月 12 日（土）・13 日（日）

会場：帝京科学大学（千住キャンパス）



一般社団法人 日本動物看護学会

目 次

大会長挨拶	2
開催案内	3
開催概要	3
大会運営についてのお願い	4
会場へのアクセス	6
フロアマップ	7
大会スケジュール	8
展示協賛企業一覧	10
要旨	11
基調講演	11
教育講演①	14
教育講演②	16
シンポジウム	18
ランチョンセミナー	23
一般演題発表	24
口頭発表	24
ポスター発表	43
広告協賛企業一覧	61
第34回大会実行委員	69

大会長ご挨拶

日本動物看護学会第35回大会大会長
帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科教授
佐伯 潤

この度、日本動物看護学会第35回大会を帝京科学大学千住キャンパスにて開催することとなりました。昨年の第34回大会の会場となった酪農学園大学の北海道らしい雄大な眺望と広く素晴らしいキャンパスとは大きく異なりますが、本大会では隅田川とスカイツリーという東京の下町らしい景色とコンパクトなキャンパスで皆様をお迎えいたします。本学会が大会を担当させていただくにあたっては、愛玩動物看護師が主体で大会長も愛玩動物看護師教員に務めていただくべきだと考えておりましたが、獣医師である私が大会長となってしまいました。しかし、本大会のプログラム等の企画や準備のほとんどは、本学会の愛玩動物看護師教員が主体となり、見事なチームワークで進められ、実際には愛玩動物看護師による企画・運営が実現できたと思っております。

本学会には東京の千住と山梨の東京西の2つのキャンパスがあり、それぞれに愛玩動物看護師を養成するコースがあります。本大会の会場となります千住キャンパスにある動物看護福祉コースでは、リハビリテーション、栄養学、動物福祉を3つの柱として、教育と研究に取り組んでいます。また、山梨県上野原市にある東京西キャンパスでは、今年度から愛玩動物看護師を養成する動物看護科学コースが設置され、既存の野生動物コース、アニマルサイエンスコース、アニマルセラピーコースとも連携して、様々な動物種に対応できる愛玩動物看護師の育成を目指すことになりました。

愛玩動物看護師は、獣医療を所管する農林水産省と動物愛護を所管する環境省が合同で所管する国家資格であるということに大きな意義があります。獣医療だけではなく、人と動物がかかわる全ての現場が活躍の場であり、動物の福祉を守ることがその役割の1つとなることを意味しているからです。そのため動物福祉は、愛玩動物看護師としての心や職業倫理として、とても重要だと考えております。本大会が動物看護と動物福祉のつながりと愛玩動物看護師の社会における新たな役割を考える場となればとの願いを込め、今回の大会のテーマを「動物看護と動物福祉が紡ぐ未来」といたしました。

本大会のテーマに基づき、シンポジウムと教育講演を企画しております。シンポジウム（9月12日土曜日15時～）は、動物の行動と管理学会のご協力のもとに「動物福祉への取り組み その歩みと課題を考える」と題して、ご参加の皆様と動物福祉について共通認識を持ちたいと考えております。また、教育講演としては「動物介在介入から動物介在サービスへ—公衆衛生の視点から考える愛玩動物看護師の役割—」（13日日曜日13時～）と「アニマルソーシャルワークの現状と愛玩動物看護師への期待」（13日日曜日14時40分～）の2つを企画しており、愛玩動物看護師の社会に対する新たな役割や可能性について考えたいと思っています。さらに今回、新たな試みとして、参加した学生達が交流する場として、9月12日土曜日の13時から「学生交流会」を開催いたします。本大会に多くの学生が参加し、それぞれの現場で活躍する愛玩動物看護師とも接することで、将来に夢や目標を持ち、多くを学んでくれることを期待しています。その他、例年同様に口頭発表やポスター発表も行われます。これらのプログラムを通じて本大会が、ご参加いただいた皆様方に愛玩動物看護師の未来を感じることができる有意義な機会となりましたら幸いに思っております。

末筆となりましたが、本大会の開催にあたり、企画や準備についてのご指導・ご助言をいただいた一般社団法人日本動物看護学会 石岡理事長と前年度の第34回大会をご担当された酪農学園大学の関係者の皆様、ご協賛やご寄付をくださった企業・団体の皆様、ご参加いただいたすべての皆様、そして、開催の企画・準備・運営に尽力した本学会教職員に心から御礼申し上げます。

開 催 案 内

開催概要

開催名称

日本動物看護学会 第35回大会

大会テーマ

動物看護と動物福祉が紡ぐ未来

会期

2026年9月12日（土）・13日（日）

大会長

佐伯 潤（帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科 教授）

会場・大会事務局

〒120-0045 東京都足立区千住桜木 2-2-1

帝京科学大学 千住キャンパス

学校法人 帝京科学大学

日本動物看護学会第35回大会事務局

E-mail : info@35rd.jsvnmeeting.jp

主催

一般社団法人 日本動物看護学会

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 6-23-4 桑野ビル 2F

Tel : 03-6841-2643 E-mail : info@jsvn.gr.jp

URL : <https://www.jsvn.gr.jp/>

大会運営についてのお願い

参加者の方へ

- 事前登録者は受付でお名前をお伝えください。名札をお渡しいたします。
- 当日参加者は、受付で参加費 (会員 5,000 円、非会員 6,000 円) を支払い、名札をお受け取りください。
- 大会中は名札のご着用をお願いいたします。
- 2日間参加される方は、名札を持ち帰り2日目に再度ご使用ください。なお、一時退館のうえ再入場される際は、守衛室へ名札をご提示ください。
- 1日目のみ参加登録の方2日目が終了後は、ネームホルダーを総合受付へご返却ください。
- 学生の参加費は無料です。学生証をご提示ください。
- クロークは第2会場 (3階 1310 教室) に設置しています。詳細は当日クロークにてお尋ねください。なお、貴重品や壊れ物等のお預かりはできません。
- 会場となる大学敷地内は全面禁煙です (喫煙所はございません)。また、会場周囲での路上喫煙もご遠慮ください。
- 9月12日 (土)はランチョンセミナーにてお弁当を準備しております。ただし、お弁当の数には限りがございます。無くなり次第終了とさせていただきますことをご承知おきください。
- 第2会場 (3階 1310 教室) にてドリンクコーナーを設けておりますので、ご利用ください。
- 駐車場はございません。参加者の方は公共交通機関をご利用いただくようお願い申し上げます。
- 会場以外の教室へのお立ち入りはご遠慮ください。

口頭発表の方へ

- 発表8分・質疑応答3分 (計11分間) です。持ち時間を厳守してください。
- 発表データは以下の日時と場所にて確認と会場パソコンへの保存をお願いいたします。
その際、USB 接続対応の記録メディアにて発表ファイルをお持ちください。
(発表時、PC 本体のお持ち込みはご遠慮ください。)
日時：9月12日 (土) 9:00 ～ 9:40 / 12:30 ～ 13:30
9月13日 (日) 9:00 ～ 9:40
場所：第2会場 (3階 1310 教室)データ提出PC受付
- 発表者はご自身の発表15分前 (前の演題開始前) までに次演者席にご着席ください。
- 発表の際は、発表者本人によるパソコン操作をお願いいたします。
- スライドを指示する場合は、Power Point のポインター機能をお使いください。

ポスター発表の方へ

- ポスターは原則として9月12日(土)10:00までに第2会場(3階1310教室)の指定場所に掲示を終えてください。
- ポスターは9月13日(日)15:30まで掲示し、16:30までに撤去をお願いします。
- ポスターは演題番号が示されていますので、指定の場所に掲示してください。
- コアタイム(9月12日(土)14:00～15:00)では、発表者はポスターの前で質疑応答に対応してください。
- コアタイムにて主発表者が不在の場合、表彰の対象とならない場合があります。
- 掲示や撤去、発表等でのご相談は事務局までお願いいたします。
- ポスターのサイズはA0サイズに準じて、幅855mm×高さ1750mmのパネルに入るサイズ以内をお願いします。

座長の方へ

- 口頭発表は発表8分・質疑応答3分(計11分間)です。円滑な進行となりますよう、ご配慮をお願いいたします。
- 次座長は、各セッションの20分前までに会場へお越しください。

意見交換会

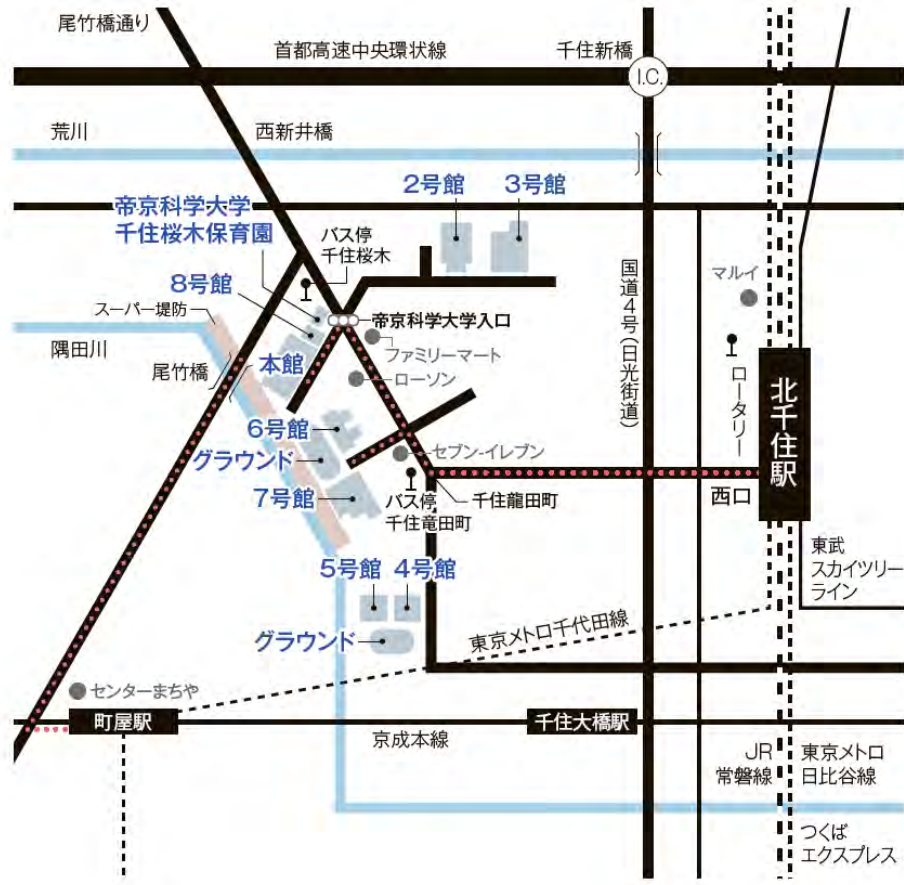
- 2階第3会場(カフェテラス)にて行います。当日ご参加をご希望の場合は、受付までお申し出ください。

学生交流会

- 3階第4会場(1308教室)にて行います。学会参加学生(愛玩動物看護師養成大学・専門学校の学生)のご参加をお待ちしております。直接会場へお越しください。

会場へのアクセス

アクセスマップ



所在地（本館）

〒120-0045 東京都足立区千住桜木 2-2-1

■北千住駅から徒歩 20 分

■北千住駅西口からバス 8 分（千住桜木バス停下車 徒歩 2 分）

【東武バス】②番乗り場：北 01「西新井大師」行き

④番乗り場：北 02、03「西新井大師」行き／北 04「西新井駅西口」行き
北 05「東京女子医大足立医療センター」行き

【都営バス】③番乗り場：王 45「王子駅前」行き／端 44「駒込病院前」行き

■町屋駅から徒歩 18 分

■町屋駅からバス 5 分（千住桜木（尾竹橋通側）バス停下車 徒歩 3 分）

【都営バス】草 41「足立梅田町」行き

フロアマップ

本館 3 階



本館 2 階



大会スケジュール

9月12日(土)

	第1会場	第2会場				第3会場	第4会場
	本館3階 1311教室	本館3階 1310教室				本館2階 カフェテリア	
		受付	ポスター展示ブース	企業展示ブース	クローク		
8:30							
9:00		9:00～17:30	ポスター掲示開始 (10時までに掲示)	協賛企業 展示ブース準備	9:00～17:30		
10:00	10:00～10:15開会式		10:00～17:00	10:00～17:00			
	10:15～11:15 基調講演						
11:00							
	11:30～12:50						
12:00	一般演題 (口頭発表)①	受付	ポスター展示	企業展示	クローク	12:00～13:00 休憩スペース (一部エリア)	
13:00	13:00～14:00 ランチョンセミナー					13:00～14:00 編集委員会 (個別エリア)	13:00～14:00 学生交流会 (1308教室)
14:00			14:00～15:00 ポスター発表 コアタイム			14:00～17:00 休憩スペース (一部エリア)	
15:00	15:00～16:45 シンポジウム		ポスター展示				
16:00							
17:00						17:00～18:30 意見交換会	
18:00							

9月13日（日）

	第1会場	第2会場				第3会場	第4会場	
	本館3階 1311教室	本館3階 1310教室				本館2階 カフェテリア		
		受付	ポスター展示ブース	企業展示ブース	クローク			
8:30								
9:00		9:00～14:40			9:00～16:40	9:00～15:30		
10:00	10:00～12:30	受付	10:00～15:30	10:00～15:30	クローク	休憩スペース （一部エリア）		
11:00	一般演題 （口頭発表）②		ポスター展示	企業展示		12:30～13:00 理事会 （個別エリア）		
12:00								
13:00								13:00～14:00
	教育講演①							
14:00								
	14:40～15:40							
15:00	教育講演②							
	15:45～16:15 表彰式・閉会式							
16:00								
17:00								

展示協賛企業一覧 (50 音順 敬称略)

学会開催期間中、第 2 会場にて、
協賛企業の展示がございますのでぜひお越しください。

株式会社 EDUWARD Press

株式会社 Gakken

株式会社 QIX

株式会社 K9 ナチュラルジャパン

株式会社坂本モデル

株式会社ニッピ

日本ペットフード株式会社

公益社団法人日本獣医師会

株式会社ファームプレス

株式会社緑書房

VCA Japan 合同会社

要 旨

基調講演

動物看護と動物福祉が紡ぐ未来

演 者

佐伯 潤

帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科 教授

司 会

小野寺 温

帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科 講師

9月12日(土) 10:15～11:15

第1会場 (1311 教室)

基調講演 「動物看護と動物福祉が紡ぐ未来」

日本動物看護学会第35回大会大会長
帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科教授
佐伯 潤

はじめに

未来を考えるためには、現状や過去の経緯について理解することも大切である。そのため、最初に愛玩動物看護師として国家資格となった理由やその経緯を振り返っておきたい。動物看護師の資格制度は、1980年台の終わりに日本獣医師会で検討が始まっている。そして、2000年代に入ると小動物臨床の現場では急速に動物看護師の存在感が増していった。2010年に宮崎県等で口蹄疫が発生した際の対応を検証する中で、獣医師以外の動物専門職の必要性が検討され、獣医療法に基づいて国が策定する「獣医療を提供する体制の整備を図るための基本方針」にも盛り込まれた。2011年に動物看護師統一認定機構が設立され、認定動物看護師制度と全国統一試験および教育制度の高位平準化が行われた。その後、多くの関係者の努力により、認定動物看護師登録が2万人以上となり、獣医療基本方針の見直し年度にあたる2019年に愛玩動物看護師法ができ、農林水産省と環境省とが所管する国家資格となった。国家資格となった社会的背景としては、犬や猫等のペットが家族の一員として考えられるようになったことや、獣医療の多様化や高度化がある。また、多頭飼育問題や動物取扱業問題等、動物の不適正飼養が社会問題化したことも関連があるであろう。

動物看護と動物福祉

「看護」を端的な言葉で表すとなると「支援」であろう。これは人の医療の看護師も獣医療の愛玩動物看護師にも共通している。人の医療であれば、患者本人の病気の回復や自立支援と家族への相談対応等の支援であり、獣医療であれば、動物の病気からの回復支援と飼い主支援となる。獣医療においては、治療対象は動物であっても主体者は飼い主であるため、飼い主への支援も重要となる。

一方、「福祉」を最も端的な言葉で表すとなると「幸せ」であろう。「幸せ」については、人の医療と獣医療では様々な点で異なる。人格を持つ「人」の場合には、重要なのは本人の意志であり、それを支える仕組みを社会も整えている。しかし、獣医療の場合には、動物の意志を確認することは難しく、また飼育下の動物の存在は飼い主に属するものであり、動物と飼い主の「幸せ」を分離することは難しく、一体として考える必要がある。

支援を行う場合にも、幸せを考える場合にも、大切なのは対象のニーズを知ることである。動物の基本的ニーズは動物福祉の基本的概念である。すなわち、動物福祉への理解なくして動物への支援、つまりは看護を行うことができないと言える。さらに愛玩動物看護師は、環境省も所管する国家資格であり、広く動物の適正な取り扱いを指導することが業務となっている。愛玩動物看護師にとって、動物福祉は職業倫理としても重要なのである。

動物看護の可能性

「はじめに」において示したように、愛玩動物看護師が法制化された背景には、小動物獣医療の多様化や高度化がある。国が今後の小動物獣医療の姿として「愛玩動物看護師を要とした獣医療」を示しているように、小動物獣医療において、愛玩動物看護師の存在は不可欠なものとなっている。今後は、診療の補助業務の幅を広げ、専門性も広げることで、さらにその重要性は増すものと思われる。

環境省が所管する分野では、動物の愛護及び管理に関する法律（動物愛護管理法）にかかわる多頭飼育問題や動物取扱業問題、動物の不適正飼養等が社会問題化している。愛玩動物看護師は適正飼養指導が業務の1つとなっていることから、動物愛護管理法が目指す、人と動物の共生社会の実現の担い手として愛玩動物看護師が位置づけられていると考えられる。動物をめぐる社会問題に

は、高齢者の動物飼育問題や多頭飼育者の貧困、災害発生時の動物飼育者の避難等、動物側だけの対応では解決できない課題が多い。そのため、前述したように、動物と飼い主の「幸せ」を一体として考える必要がある。愛玩動物看護師は、「社会の中の動物看護」を考える必要があり、それが愛玩動物看護師という職業の新たな可能性を広げることにもつながると考えている。

教育講演①

動物介在介入から動物介在サービスへ —公衆衛生の視点から考える愛玩動物看護師の役割—

演 者

的場 美芳子

株式会社プロキオン まとば動物病院 取締役

学校法人滋慶学園 仙台 ECO 動物海洋専門学校 講師

座 長

三好 哲平

帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科 助教

9月13日(日)13:00～14:00

第1会場 (1311 教室)

動物介在介入から動物介在サービスへ —公衆衛生の視点から考える愛玩動物看護師の役割—

的場 美芳子

株式会社プロキオン まとば動物病院 取締役
学校法人滋慶学園 仙台 ECO 動物海洋専門学校 講師

動物介在活動（AAA）、動物介在教育（AAE）、動物介在療法（AAT）は、人と動物の相互作用を通じて心身の健康や生活の質の向上を支援する実践として発展してきた。2014年にはIAHAIO (International Association of Human-Animal Interaction Organizations)により、これらを包含する動物介在介入（AAI）が整理された。その後、専門職の関与、実践基準、介在動物の福祉をより明確にする必要性が指摘され、Binderらは2024年、AAIに代わる概念として動物介在サービス（AAS）を提案した。AASは単なる用語の置き換えではなく、専門職の関与と動物福祉をより明確に位置づけたサービス体系である。

公衆衛生の視点からみると、AASは医療・福祉・教育の代替ではないが、高齢者の社会的孤立の予防、生活の質の向上、子どもの社会性や学習支援、健康教育、医療・リハビリテーションへの参加促進など、人々の健康を「治す」だけでなく「支える」地域の健康資源として捉えることができる。そして、安全で持続可能なサービスとするためには、人への効果のみならず、介在動物の身体的・心理的健康と福祉を保障することが不可欠である。動物の健康状態、行動特性、適性、感染症対策、ストレス徴候、ハンドラーとの関係性、対象者や活動環境、事故等のリスクを総合的に評価する専門性が求められる。

2022年の愛玩動物看護師法施行により、愛玩動物看護師は国家資格となり、愛護・適正飼養に関する助言・支援を担うとともに、養成カリキュラムでもAAA・AAE・AATの目的や介在動物の公衆衛生的・行動学的適性、これらの活動への関わりが示されている。

AASにおいて愛玩動物看護師は、獣医師と連携した介在動物の健康・栄養管理、衛生管理、感染症対策、行動特性やストレス徴候の把握などに専門性を発揮できる。さらにAAEは、子どもが動物の特性や適切な関わり方、生命への配慮を学ぶ機会であり、将来の飼い主となり得る世代への適正飼養教育としての意義を有する。また、介在動物のハンドラーが飼い主である場合には、動物の健康や行動、ストレスへの理解を深め、適正な飼養と活動を支援する機会にもなる。愛玩動物看護師には、単なる「活動動物の健康管理者」にとどまらず、人・動物・環境を総合的に捉え、活動の実施・継続に関する判断を多職種と共有し、適正飼養を支援するとともに必要な専門職をつなぐ役割が期待される。

本講演では、AAIからAASへと変化する概念とその背景を整理し、福祉、教育、医療・リハビリテーション等の実践例を通して、公衆衛生からみたAASの意義と課題を概説する。人・動物・環境をつなぎ、人と動物双方のウェルビーイングを支える専門職として愛玩動物看護師を位置づけることが、今後のAASの発展を支える基盤になると考える。

教育講演②

アニマルソーシャルワークの現状と愛玩動物看護師への期待

演 者

阿部 令子

アニマルソーシャルワーク研究協会 愛玩動物看護師

座 長

小野寺 温

帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科 講師

9月13日(日)14:40～15:40

第1会場 (1311 教室)

アニマルソーシャルワークの現状と愛玩動物看護師への期待

アニマルソーシャルワーク研究協会 愛玩動物看護師
阿部令子

「ソーシャルワーク」とは、困っている人々の声に耳を傾け、人々の幸せの為に、必要に応じた社会資源へつなげるための援助活動を意味し、それを実施する福祉専門職を「ソーシャルワーカー」といいます。動物医療に関わるソーシャルワークとしては、2002年からアメリカのテネシー大学が「ベテリナリーソーシャルワーク」の教育を実施しており、日本でも「ネグレクト」「多頭飼育崩壊」「動物依存」など、人と動物の両者が関わる問題が社会的に注目され、「ベテリナリーソーシャルワーク」の必要性が高まっています。

人と動物に関わる問題が起こると、当然、動物たちは幸せではありません。しかし、私たちには「愛玩動物看護者の倫理綱領」があり、その中で「動物福祉の向上に努める」ことが挙げられています。一方で環境省の多頭飼育対策ガイドラインなどを見てみると、動物病院や獣医師、動物愛護ボランティアとの連携は明記されていますが、連携先の動物病院においてメインで健康管理や飼育に関してアドバイスを行うであろう「愛玩動物看護師」は明記されていません。実際、これらの問題が起こった時に愛玩動物看護師のできることはほとんどないのが現状です。では、私たち愛玩動物看護師は、アニマルウェルフェアの向上を図るために何をすればよいのでしょうか？考えた結果、今までも動物たちと飼い主家族、そして様々な動物医療福祉関係者と連携をとってきた愛玩動物看護師だからこそできる新たな支援を模索するため、同じ思いを持つ仲間たちと「アニマルソーシャルワーク研究協会」を立ち上げることにしました。

協会の活動が続ける中で分かってきたことは、アニマルウェルフェアを向上させるためには「人の福祉と動物の福祉を別々に、しかも同時に支援する必要がある！」ということです。しかし、私たちは動物を介して人を支援することはできますが、人を直接支援することはできません。そこで、当研究協会では人支援の専門職であるソーシャルワーカーとつながり、勉強しようと考え、意見交換会を始めました。

今回は、その意見交換会を行うことで得た学びや現状、そして学びの中で見えてきた、当研究協会が考える、「これから愛玩動物看護師が担うべき役割」について事例を交えながらお伝えしようと思います。

この講演を通して、「アニマルソーシャルワーク」について関心を持っていただけたら幸いです。

シンポジウム

「動物福祉への取り組み その歩みと課題を考える」

趣旨説明

加隈 良枝

帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科 准教授

講演

- 1) 「動物の行動と管理学会」で動物福祉研究が盛んな理由

竹田 謙一

信州大学 農学部 食料生産システム科学コース 教授

- 2) 産業動物における動物福祉の取り組み

小針 大助

茨城大学 農学部 食生命科学科 准教授

- 3) 動物福祉に配慮した社会の実現に向けて獣医学が果たす役割

ーより良い飼育の文化差をふまえてー

大谷 祐紀

北海道大学 One Health リサーチセンター/獣医学部 特任助教

- 4) 展示動物における動物福祉研究

小倉 匡俊

北里大学 獣医学部 動物資源科学科 准教授

ディスカッション

座長	加隈 良枝 (帝京科学大学)
コメンテーター	佐伯 潤 (帝京科学大学)
	小野寺 温 (帝京科学大学)

9月12日(土)15:00～16:45

第1会場 (1311 教室)

「動物の行動と管理学会」で動物福祉研究が盛んな理由

○ 竹田謙一¹⁾

1) 信州大学農学部

「動物の行動と管理学会」は、2019年に日本家畜管理学会と応用動物行動学会が統合して誕生した。ただし、日本家畜管理学会は1964年に設立された日本家畜管理研究会を、応用動物行動学会は1984年に設立された家畜行動に関する小集会を母体としており、その歴史は古い。

家畜管理学とは、飼養管理技術の開発や省力化を目指すだけでなく、管理者を含めた飼育環境に対する家畜の適応(coping)を機能的・構造的に明らかにする学問分野である。そして、環境変化に対して、第一義的に表出する反応は行動であり、疾病の初期兆候も、正常な行動からの逸脱として現れる。

一方、応用動物行動学とは、行動の記述と分析にとどまらず、行動出現のメカニズム、機能、発達、および進化の視点から動物の行動をとらえながら、飼育や管理の場面に応用しようとする分野であり、両者の研究領域は大きく重複する。

動物福祉の議論は、Harrison(1964年)の著書『アニマル・マシーン』の出版を契機として、英国の集約畜産を対象に始まった。そこでは、飼育方式の適否を家畜の生産性のみで判断するのではなく、動物が感受性のある存在(sentient being)として捉え、動物が受ける苦痛の排除が求められた。その反応系の1つである行動の把握は、飼育環境の客観的な評価と改善に直結する。本学会で動物福祉研究が盛んなのは、家畜管理学と応用動物行動学が培ってきたこの方法が、そのまま動物福祉の評価に用いられるからである。

動物看護学は、動物医療の一翼を担うだけでなく、動物の心身の健康を日々管理し、その生活を支える分野ではないだろうか。主な対象動物は伴侶動物となるが、動物の状態を行動から読み取り、飼育環境を評価して改善するというアプローチは、本学会の動物福祉研究への取り組みと重なる。入院動物のストレス評価と環境エンリッチメント、行動の逸脱を手がかりとした疼痛や疾病の早期検出、低ストレスハンドリングなどには、本学会が家畜や展示動物を対象に蓄積してきた知見が応用できる。愛玩動物看護師が国家資格となり、飼い主への指導・助言が業務に位置づけられた今日、行動学と動物福祉の知見は、両分野が共有すべき基盤である。

産業動物における動物福祉の取り組み

○ 小針大助¹⁾

1) 茨城大学農学部

アニマルウェルフェア（動物福祉）への取り組みは、イギリスにおいて産業動物の飼育管理上の問題を改善しようとする動きから始まり、その後、欧米諸国を中心に世界へと広がってきた。現在では、その対象も産業動物にとどまらず、伴侶動物、実験動物、動物園動物、さらには野生動物へと広がっている。

一方、動物の取り扱いや「より良い飼育」のあり方に対する考え方は、経済的、文化的、宗教的背景などによって異なり、国や地域、さらには関係するステークホルダーによっても必ずしも一致していない。そこでアニマルウェルフェアでは、人の価値観だけで動物の取り扱いの良否を判断するのではなく、「動物がどのような状態にあるのか」に着目し、その状態を科学的かつ客観的に評価することが重視されてきた。すなわち、科学的な評価を共通言語として、「動物にとってより良い取り扱いとは何か」を考えることが、現代のアニマルウェルフェアの基本的な考え方となっている。

こうした国際的な動きを背景として、2004年には世界獣疫事務局（OIE、現 WOAH）の陸生動物衛生規約（Terrestrial Animal Health Code）にアニマルウェルフェアに関する基準が導入され、現在では動物の健康とともに、そのウェルフェアに配慮することが国際的に重要な課題として位置づけられている。

日本においても、2023年7月に農林水産省から畜種ごとの「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」が示され、産業動物の飼育現場においてアニマルウェルフェアを意識した飼養管理の重要性は一層高まっている。本講演では、産業動物におけるアニマルウェルフェアの基本的な考え方を整理するとともに、わが国を取り巻く現状と課題、さらに今後求められる取り組みについて紹介する。

動物福祉に配慮した社会の実現に向けて獣医学が果たす役割 ーより良い飼育の文化差をふまえてー

○ 大谷 祐紀^{1) 2)}

1) 北海道大学 One Health リサーチセンター 2) 北海道大学 獣医学部

獣医学領域においても、動物福祉への理解が広がりつつある。動物福祉の基本理念である5つの自由のうち、「痛み・負傷・病気からの自由」に獣医学は強く寄与するが、身体的健康は動物福祉をかたちづくる一因子に過ぎず、動物の精神や行動への理解が課題である。本講演では、社会科学手法によって示された動物福祉に関する認識の日本とイギリス間の違いについて、伴侶動物の飼養を例に紹介する。例えば日本では、環境省が飼養ネコの屋内飼養を強く推奨する一方、イギリスではネコが屋外へアクセスできることがより良い飼育と考えられている。「本来の行動がとれる自由」の観点から、ネコが屋外で活動することは、その福祉を向上させ得るが、交通事故や迷子といったリスクに対して、日本では回避への強い意識が働いている可能性が示された。日本においても動物福祉への理解と配慮はこれからますます発展していくことが予想され、日本のステークホルダーが納得感をもった社会実装が重要である。その実現に向け、愛玩動物看護師や獣医師が果たす役割について一緒に考えたい。

展示動物における動物福祉研究

○ 小倉匡俊¹⁾

1) 北里大学獣医学部

動物園や水族館で飼育される展示動物における動物福祉は、いわゆる「4つの目的」(レクリエーション・環境教育・種の保存・調査研究)を着実に遂行するための基盤として位置づけられている。2025年には世界動物園水族館協会による動物福祉戦略が改定された。また公益社団法人日本動物園水族館協会(JAZA)からはJAZA 将来構想 2025 が公開され、4つの目標の中心に「生きものたちのより良い状態」が掲げられるとともに、15のアクションの中に「アニマルウェルフェア(動物福祉)」が含まれている。このように、動物福祉に対する配慮を進めることは、展示動物における重要なミッションとして位置づけられている。展示動物は、産業動物や実験動物とは異なり①種の多様性が高い、②動物種あたりの飼育個体数が少ない、③遺伝的多様性が高く個体差が大きい、という特徴がある。これを背景に、種差や個体差を踏まえた配慮の実践が求められている。これら①～③の特徴は、伴侶動物のうちエキゾチックアニマルにもあてはまるだろう。本講演では、展示動物を対象とした動物福祉の評価についての研究事例を紹介し、研究の意義や普遍性について皆さんと共有したい。

ランチオンセミナー

VCA Japan 合同会社 主催

動物看護が紡ぐ未来 —動物福祉の視点から考える、私たちの臨床実践—

演 者

黒瀬 安寿加

パル動物病院 愛玩動物看護師長

司 会

小泉 亜希子

帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科 講師

9月12日(土) 13:00 ～ 14:00

第1会場 (1311 教室)

講演要旨は当日配布いたします。

一般演題（口頭発表）

演題番号	発表時間	演 題	演 者
9月12日(土)			
O-01	11:30～11:41	AIによる猫のリラックス度評価の有用性検討－Cat Stress Scoreとの比較－	中村 友香
O-02	11:41～11:52	ネコのストレス状態がFeline Grimace Scaleスコアに与える影響	邊見 沙穂
O-03	11:52～12:03	生をまっとうさせる動物のための動物福祉－ケイパビリティ・アプローチにみる動物の幸福－	五十子 弥那
O-04	12:08～12:19	馬の飛節への術後バンテージの工夫が覚醒起立後に与える影響	眞々田 樹莉
O-05	12:19～12:30	ブタ敗血症ショックモデルにおける末梢灌流指数と体温の相関性	神谷 真奈
O-06	12:30～12:41	敗血症モデルブタにおける白血球の変動	山口 杏樹
9月13日(日)			
O-07	10:00～10:11	イヌにおけるクロルヘキシジングルコン酸塩製剤を用いた術野消毒・洗浄効果の比較検討	安藤 真葵
O-08	10:11～10:22	犬の血液生化学検査における小型分析装置アトライズVの有用性の検討	安木 碧
O-09	10:22～10:33	猫血液型カード凝集法における全血検体と洗浄赤血球の判定比較	中村 知尋
O-10	10:38～10:49	日英の動物病院ウェブサイトにおける情報発信	井上 もも
O-11	10:49～11:00	訪問動物看護の実態調査～課題とターミナルケアについて～	青木 はるか
O-12	11:00～11:11	愛玩動物看護師の接し方が診察中の犬の生理学的・行動学的指標に及ぼす影響	佐藤 涼乃
O-13	11:21～11:32	熊本県における猫白血病・猫免疫不全ウイルス感染の回顧的調査	福留 華梨
O-14	11:32～11:43	イヌの年齢が周麻酔期合併症の発生に及ぼす影響	清水 夕貴
O-15	11:43～11:54	本学における過去3年間の犬および猫の輸血症例の解析からみた安全な輸血実施への取り組み	塩見 奈々
O-16	11:59～12:10	トイ・プードルにおける垂直分力と歩行観察指標の関連性	高橋 優
O-17	12:10～12:21	健常犬における水中トレッドミル運動時の水温設定に関する検討	河合 彩弥

一般演題（口頭発表）座長

演題番号	発表時間	所 属			座 長	
9月12日(土)						
O-01～03	11:30～12:03	帝京科学大学	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	加隈	良枝
O-04～06	12:08～12:41	帝京科学大学	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	佐伯	潤
9月13日(日)						
O-07～09	10:00～10:33	帝京科学大学	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	深山	俊治
O-10～12	10:38～11:11	帝京科学大学	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	柳澤	綾
O-13～15	11:21～11:54	帝京科学大学	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	山本	和弘
O-16～17	11:59～12:21	帝京科学大学	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	川村	和美

—Cat Stress Score との比較—

○ 中村 友香¹⁾・武井 ほのか¹⁾・永井 知夏¹⁾・佐藤 那海¹⁾・尾関 大地²⁾・岩花 倫生¹⁾

1) 帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科 2) 株式会社 Carelogy

序文

猫は本質的に独立性の高い動物であり、情動や体調の変化を表出しにくい傾向がある。そのため、飼い主が猫の痛みやストレスに気づくことは容易ではなく、家庭内においてもストレスが見過される可能性が高い。株式会社 Carelogy が開発した CatsMe! (猫の表情から Artificial Intelligence、AI、が痛みを評価) と人による Feline Grimace Scale® (FGS) で判定した猫の痛みの評価の比較について第 45 回動物臨床医学会で報告した。次に、動画における猫のストレスを Cat Stress Score (CSS) を用いて評価し、その結果を CatsMe! で解析して学習させた。これらを統合することにより CatsMe! で新たにリラックス度や健康スコアを独自に評価するアプリが開発された。そこで、動画とそこから得られる静止画を用いて、CSS と新たに開発された CatsMe! Ver.4.4.6 で得られたリラックス度と健康スコアとの相関性を検討した。

材料および方法

大学内、ペットショップ、猫カフェ、動物病院および一般家庭に撮影協力を依頼し、132 の猫の動画を収集した。本研究は帝京科学大学動物実験委員会の承認を受けて実施した（承認番号：26C011）。評価者 4 名が各動画をそれぞれ個別に視聴し、各動画について任意のタイミングでスクリーンショットし、合計 4 枚の静止画像を得た。取得した静止画像を CatsMe! に登録し、アプリ上でリラックス度と健康スコアの数値を得た。評価者 4 名が各動画について CSS を評価し、CatsMe! によるリラックス度あるいは健康スコアとの相関性について統計解析ソフト、IBM SPSS Statistics Base ver.3.0 を用いて解析した。

結果

今回撮影された動画は完全にリラックス、CSS 1 からとても緊張している CSS 4 までの範囲であった（図 1）。また、リラックス度は 48.0 から 82.0 で、健康スコアは 10.0 から 97.5 であった。一方、CSS とリラックス度あるいは健康スコアとの間に明確な相関は得られなかった。

考察

CSS と CatsMe! のリラックス度および健康スコアとの関連が明確でなかった要因として、CatsMe! の AI が FGS に基づく猫の顔の評価に加え、足の状態や姿勢、動きなどの行動学的特徴を学習する過程で、活動性に重み付けした評価を行っている可能性が考えられた。また、CatsMe! では目の開きや耳の角度などの表情特徴が評価に強く反映される一方、瞳孔径の変化や眠気などの生理的变化は十分に評価されない可能性があり、これが CSS との評価のずれにつながったと考えられた。

CSS は動画を用いて姿勢、表情、動き、周囲への反応を総合的に観察し、猫のストレスや緊張状態を評価する。一方、CatsMe! は写真から耳、目、ヒゲ、口元、姿勢などの特徴を解析し、猫のリラックス度や健康状態を客観的かつ簡便に評価するツールである。そのため、両者は評価対象や評価方法が異なり、結果が一致しない場合があると考えられた。しかし、CatsMe! は猫の身体的特徴を客観的に数値化できることから、日常的な健康管理や福祉評価に活用できる有用なツールであると考えられた。

本研究は、株式会社 Carelogy よりアプリの提供を受けて実施された。

O-02 ネコのストレス状態が Feline Grimace Scale スコアに与える影響

○邊見沙穂¹⁾、田草川佳実¹⁾、田草川史彦¹⁾

1) 聖母坂どうぶつ病院

序文

Feline Grimace Scale (FGS) は、ネコの顔貌 (表情) の変化を評価することにより疼痛を判定する急性疼痛評価スケールであり、その妥当性が証明されている。ネコは病院環境や入院などの環境変化によりストレス反応を示すことが報告されており、その反応は表情にも影響を及ぼす可能性がある。FGS は表情を評価するスケールであることから、ストレス状態による表情の変化が FGS スコアに影響を及ぼす可能性が考えられる。Cat Stress Score (CSS) は病院環境下におけるネコのストレス状態を評価する行動学的指標として広く用いられている。しかし、我々が渉猟し得た限りでは、FGS と CSS との関連性を直接検討した報告は認められなかった。そこで本研究では、疼痛を伴わないと判断したネコを対象に、FGS スコアと CSS との関連性を明らかにすることを目的とした。

材料および方法

対象は、聖母坂どうぶつ病院に一時入院した American Society of Anesthesiologists (ASA) 分類IまたはIIに該当し、疼痛を伴わないと判断したネコ 30 頭とした。短頭種および顔貌評価に影響を及ぼす解剖学的異常を有する個体は除外した。入院後 15 分間の順応時間を設けた後、ケージを開放し、約 30 秒 (25~35 秒) の動画を撮影した。撮影した動画をもとに、CSS 評価者および FGS 評価者がそれぞれ独立して評価した。CSS は Kessler らの基準に従い 7 段階で評価した。FGS は 5 つの Action Unit (EARS、EYES、MUZZLE、WHISKERS、HEAD) を 0~2 点で評価し、各 Action Unit の合計を最大スコアで除して最終 FGS スコアを算出した。主要評価項目は CSS と FGS との関連性とし、BCS、年齢層および被毛色を調整した多変量線形回帰分析を実施した。副次評価項目として各 Action Unit との関連性および FGS レスキュー鎮痛閾値 (0.39) 超過との関連性を解析した。

結果

解析対象は 30 頭であった。多変量線形回帰分析では、CSS は FGS 総スコアと有意に関連していた ($\beta=0.130$ 、95%信頼区間: 0.090–0.169、 $p<0.001$)。また、CSS は EARS、MUZZLE、WHISKERS および HEAD の Action Unit と有意な関連を認めたが、EYES との関連は認められなかった。さらに CSS が高いネコほど FGS レスキュー鎮痛閾値 (0.39) を超過する割合は増加し、CSS5 以上では全例が閾値を超過した。

考察

本研究の結果から、FGS は疼痛だけでなく病院環境に伴うストレスの影響も受ける可能性があることから、FGS を用いた疼痛評価ではネコのストレス状態を考慮することが重要であると考えられた。一方、本研究では CSS および FGS はいずれも主観的評価法を用いたため、評価者間の信頼性については十分に検討されていない。今後は疼痛を伴う臨床症例を対象とした検討に加え、評価者間信頼性についても検討する必要がある。開示すべき利益相反なし。

○ 五十子 弥那

1) 東京農工大学 連合農学研究科

序文

人間による動物の取り扱いをめぐる議論には、功利主義や、義務論に基づく動物倫理が主要な立場として確立している。一方、本研究が主眼とする動物福祉は、従来、科学的指標によって動物の状態を評価し、苦痛やストレスへの配慮を通じて動物の幸福を実現しようとする概念であるといえる。これは、功利主義や義務論とは異なり、動物の利用を前提としつつ、その過程で生じる苦痛の軽減や快適性の提供など、動物が心身ともに健康で幸福であるための具体的な取扱いやその管理方法に焦点を当てた動物への配慮を提示するものである。そこで筆者は、動物福祉を考慮する際、人間の動物に対する接し方や態度がもたらす影響も動物福祉配慮において重要となると考える。伴侶動物は人間との密接な関係性を構築してきたことから、その生において人間との共生が不可欠となった動物である。したがって、伴侶動物が人間と共生する中で、彼らの動物福祉を考慮するには、人間の動物に対する態度や倫理観が重要となると考える。

本研究は、マーサ・C・ヌスバウムが提唱する「ケイパビリティ・アプローチ」を手がかりに、人間が他のカテゴリー動物とは異なる目的として、その生をまっとうすることを求め、人間との独特な関係性を築いてきた伴侶動物を対象に、動物福祉を理論的文脈で捉えることによる思想的再検討を目的とする。

材料および方法

本研究は、マーサ・C・ヌスバウムの著書『JUSTICE FOR ANIMALS』を主に扱い、彼女が提唱する「ケイパビリティ・アプローチ」の理論から、動物福祉を思想的再検討することを目的とする。そのため、研究方法は文献研究とする。

結論

ケイパビリティとは、人間を含めた動物が何かをおこなったり、何かになったりするための実質的自由を意味し、ヌスバウムはこの、人びとの「できること」と「なれること」の幅に着目した理論を展開している。ヌスバウムが提唱するケイパビリティ・アプローチは、知覚を持つすべての動物に当てはまるものであり、それは、生きようとする生き物に繁栄する適切な機会を与えることを目的としている。動物にとっても人間と同様に、苦痛を避けることだけでなく、社会関係や生殖、自由な移動や遊び、そして楽しみなどが重要となる。そのためには、我々人間が動物の代弁者となり、動物がもつケイパビリティを発揮することができる機会の提供、そして、それを選択することができる環境の提示が必須となる。

したがって、ケイパビリティ・アプローチに基づく、生をまっとうさせる動物のための動物福祉は、苦痛やストレスといったネガティブなウェルフェアへの配慮だけにとどまらない。人間の伴侶としての関係性をもつ犬や猫が、その種として有するケイパビリティを損なわれることなく、人間との共生の中で、時には人間の代弁を通じてそのケイパビリティを発揮する機会を得ることが求められる。そして、その機会が実際に発現することによって生じるポジティブなウェルフェアへの配慮も同様に重要となる。また、この理論は、「5つの領域」が提示するポジティブな経験への福祉的配慮の必要性を正当化し、その配慮を追求するための理論的基盤ともなり得ることが言える。

開示すべき利益相反なし。

O-04 馬の飛節への術後バンテージの工夫が覚醒起立後に与える影響

○ 眞々田 樹莉

NOSAI 北海道 家畜高度医療センター

序文

当センターにおける馬の飛節に対する関節鏡は、最も依頼件数の多い手術の一つである。術後は患部にバンテージを巻くが、飛節は巻き方によって術後のバンテージ脱落に差が出やすい。このような背景から今回は、飛節におけるバンテージに関して複数の巻き方を実施し、ずれや脱落について検討した。

材料および方法

2025 年 12 月から 2026 年 7 月までの間に、酸素-イソフルラン吸入麻酔下、仰臥位にて飛節の関節鏡手術を行ったサラブレッド種 19 頭 24 肢を対象とした。年齢の内訳は、当歳馬 1 頭、1 歳馬 17 頭、3 歳馬 1 頭であった。術後バンテージはガーゼ、綿ロール、粘着性伸縮包帯の 3 層を基本とし、当センターで以前より行っている基本の被覆方法である綿ロールを巻いたのちに粘着性伸縮包帯で覆う方法(N群)に加え、近位部分の綿ロールを外側に折り返す方法(F群)、綿ロールが重なる部分に粘着性伸縮包帯を挟みこんで巻き始める方法(S群)とした。バンテージの状態は、A：ずれなし、B：軽度のずれ(多少のずれ、飛節に残留)、C：重度のずれ(大きく崩れ、辛うじて飛節に残留)、D：脱落(飛節から脱落、球節へ下降等)と 4 つのグレードでスコアリングし、A を 0 点、B を 1 点、C を 2 点、D を 3 点として、覚醒起立後および翌日のバンテージの状態を比較、検討した。起立スコアは、1：Excellent、2：Very Good、3：Good、4：Fair、5：Poor とした。覚醒起立後の状態は麻酔担当獣医師からの写真と演者による目視、翌日の状態は担当獣医師に問い合わせた。統計処理は、3 群間の比較にはクラスカル・ウォリス検定を用い、有意差が認められた場合は事後解析としてスチールの・ドゥワス法による多重比較を行った。有意水準は 5%未満 ($p < 0.05$) とした。

結果

24 症例について、各群の患肢の数はN群 11 肢、F群 8 肢、S群 5 肢であった。起立スコア平均は 1.2 ± 0.45 (中央値 1.0) であった。バンテージの状態比較として、N群では起立後中央値が 2.0 (A：7 肢、B：2 肢、C：2 肢)、翌日 1.0 (B：7 肢、C：1 肢、D：3 肢)。F群は起立後 1.0 (A：2 肢、B：5 肢、D：1 肢)、翌日 3.0 (B：3 肢、D：5 肢)。S群は起立後 1 (A：1 肢、B：2 肢、C：2 肢)、翌日 3 (B：1 肢、C：4 肢) であった。クラスカル・ウォリス検定の結果、起立後 ($p=0.238$)、翌日 ($p=0.07$) の状態では 3 群間に有意差は認められなかった。

考察

F 群では、折り重ねた近位部分に対して伸縮包帯を巻く強度が低く、バンテージが皮膚から浮いてしまったことが翌日のずれや脱落に繋がったと考えられる。また、S 群では、伸縮包帯の間にガーゼを挟むことで巻きはじめの粘着が弱まり、バンテージ全体の密着圧が低下したことが考えられる。また、馬の気性の差が大きく影響し、気性が激しい馬においてはバンテージが食いちぎられてしまったケースもあった。N 群は数十年前から実施している巻き方であり、この方法が相応のバンテージの維持に有効であることを示唆していると考えられた。

当センターの術後被覆は覚醒時の術創保護を目的としているが、翌日の巻替えまで脱落しづらいバンテージが理想的である。今後は綿ロールのサイズや伸縮包帯の粘着性などを考慮しつつ、より良い術創被覆ができるよう工夫していきたい。開示すべき利益相反なし。

O-05 ブタ敗血症性ショックモデルにおける末梢灌流指数と体温との相関性

○ 神谷 真奈¹⁾・宮庄 拓²⁾・伊丹 貴晴³⁾

¹⁾ 小滝橋動物病院グループ もみじ山通りペットクリニック

²⁾ 酪農学園大学 獣医学群 獣医保健看護学類

³⁾ 酪農学園大学 獣医学群 獣医学類

序文

末梢灌流指数 (Perfusion Index、以下、PI 値とする) は、循環動態だけでなく、体温の変動と関連していると考えられている。特に敗血症患者の体温変動および PI 値は死亡率や重症度と関連しており、体温変動を把握することは敗血症の早期発見、早期治療につながる可能性が示唆されている。しかし、敗血症性ショックの循環動態と PI 値の関係を示した報告はみうけられない。そのため、本研究では、ブタ敗血症性ショックモデルを用い、敗血症性ショックの動態と PI 値の関係および PI 値と深部温、末梢の体表温の相関を明らかにすることを目的とした。

材料および方法

すべての実験は酪農学園大学実験動物委員会が定めるガイドラインに従い、実施した (承認番号: VH24B1)。供試動物には約 30kg のブタ (n=8) を使用した。麻酔安定化時間を確保した後、プレ値 (ベースライン値) を測定した。その後、リポポリサッカライド (*Escherichia coli* 055:B5 (purified by ion-exchange chromatography, TLR ligand tested)、以下 LPS とする) を 20 μ g/kg/hr. で 120 分間静脈内に持続投与し、ブタ敗血症性ショックモデルを作出し、LPS 投与開始後 30 分間間隔で 360 分目まで体温を測定した。Rad-97 (Masimo 社製、日本) を設置し、PI 値、PiCCO2 (PILSION Medical systems、ドイツ) から深部温、非接触型体温計 (HuBDIC 社製、日本) およびハンディサーマルカメラ (AS ONE 社製、日本) で体表面の温度を測定した。供試ブタの右後肢の遠位から表面温を 3 箇所測定した。

結果

PI 値は多くの症例で LPS 投与開始後 30 分目に下降、60~90 分目に上昇し、その後、再び下降した。測定肢の 3 箇所および深部温において PI 値との相関に統計学的有意差が認められた。また、経時的にも測定肢の近位および遠位では PI 値の変動に伴い、表面温の上昇および低下がみられた。PI 値は敗血症性ショック時の循環動態を捉え、深部温および体表温と相関関係が示され、末梢の体表温の変動も捉えていることが分かった。

考察

PI 値は敗血症性ショックの Warm ショックおよび Cold ショックの血管拡張および血管収縮を反映していると考えられた。測定肢の最遠位では近位および遠位と比較すると、大きな体温の変動がみられず、ゆるやかな低下を示し、末端の循環不全や環境温への体温損失が考えられた。しかし、全体では最遠位でも相関が認められたため、PI 値は、末梢への温度勾配を反映していることが明らかとなった。よって、灌流状態が体温変動と関連していることを確認した。

開示すべき利益相反なし。

○山口 杏樹¹⁾・宮庄 拓²⁾・伊丹 貴晴³⁾¹⁾ 酪農学園大学 獣医学研究科 獣医保健看護学専攻 修士課程²⁾ 酪農学園大学 獣医学群 獣医保健看護学類³⁾ 酪農学園大学 獣医学群 獣医学類

序文

敗血症とは「感染症に対する制御不能な宿主反応に起因した生命を脅かす臓器障害」と定義され、その機序は未だ不明な点が多い。自然発生的な敗血症では白血球の急激な減少または増加が起こり、白血球の核の左方移動やリンパ球の変化が見られる。LPS (lipopolysaccharide : エンドトキシン) を用いた動物モデルでは白血球の急激な減少が見られるが、その時間経過による白血球の変動についての報告は限られている。本研究では実験的に敗血症モデルブタを作出し、白血球の変動を評価した。

材料および方法

すべての実験は酪農学園大学実験動物委員会が定めるガイドラインに従い、実施した（承認番号：VH24B1）。供試動物には体重約 30kg のブタ（三元豚、雌）8 頭を用いた。鎮静し、麻酔導入し、麻酔安定化時間を確保した後に、LPS (*Escherichia coli* 055:B5 (purified by ion-exchange chromatography, TLR ligand tested)) を 20 μ g/kg/hr. で 120 分間静脈内に持続投与し、敗血症モデルを作出した。大腿動脈から、LPS 投与開始時を 0 分として 30 分間隔で 360 分目まで（または死亡するまで）経時的に採血し、CBC（全血球計算）測定および血液塗抹標本の作成を行った。血液塗抹標本は各時間で 2 枚作製し、ディフ・クイック染色およびギムザ染色により白血球の変動を観察した。

結果

CBC 測定の結果、白血球数は LPS 投与開始から 30 分で急激に減少し、血小板数は LPS 投与開始 30 分目から緩徐に減少し続けた。血液塗抹標本では、時間経過によりリンパ球の割合が多くなり、反応性リンパ球が観察された。また、好中球は分葉核好中球の割合が低下し、桿状核好中球の割合が増加した。さらに、LPS 投与開始 30 分目から血小板の凝集が観察され、巨核球が観察された個体も見られた。

考察

LPS 投与開始 30 分で見られた急激な白血球の減少は、全身での炎症反応により全身的に白血球が動員されたためと考えられた。塗抹標本で認められた好中球の左方移動は、炎症に伴う好中球需要の増加により、骨髄から未熟好中球が早期に動員されたことを反映していると考えられた。LPS 投与開始 30 分目からの緩徐な血小板の減少は、炎症に伴う凝固系の活性化による血小板の動員に加え、塗抹標本で観察された血小板凝集により、CBC での血小板数が実際より低値に測定された可能性も考えられた。また、末梢血中で見られた巨核球の出現は、血小板の動員に対する反応性変化を反映していると考えられた。

開示すべき利益相反なし。

O-07 イヌにおけるクロルヘキシジングルコン酸塩製剤を用いた術野消毒・洗浄効果の比較検討

○ 安藤 真葵¹⁾・森貞 花帆²⁾・毛利 桃音²⁾・山下 翔太²⁾

長尾 杏樹²⁾・牧原 優花²⁾・岸口 世奈²⁾・宮部 真裕²⁾

1) 岡山理科大学 獣医学教育病院 2) 岡山理科大学 獣医学部 獣医保健看護学科

序文

現在、小動物獣医療における術野消毒法は、界面活性剤含有クロルヘキシジングルコン酸塩製剤（主にヒビスクラブ消毒液、住友ファーマ）とアルコール製剤の2剤を併用する方法が広く用いられている。しかしながら、界面活性剤が含まれることで洗浄効果は期待できるものの、周囲の被毛への付着・固化による術創周囲の衛生環境悪化が懸念される。そのため本研究では、術野消毒法の改善を目的として界面活性剤含有クロルヘキシジングルコン酸塩と界面活性剤非含有クロルヘキシジングルコン酸塩による術野洗浄・消毒効果の比較検討を行った。

材料および方法

本学獣医保健看護学科飼育の健常ビーグル5頭（雄2頭、雌3頭、23ヶ月齢 - 68ヶ月齢）を用い、界面活性剤含有クロルヘキシジングルコン酸塩群（ヒビスクラブ群）と界面活性剤非含有クロルヘキシジングルコン酸塩群（ヒビテン群）で消毒及び洗浄効果の比較検証を行った。各検証前に対象動物の左右側腹部を10cm×10cmで剃毛し、残留した細かい被毛を十分に取り除いた。消毒効果の検証では、スワブを用いて消毒前後の皮膚表面をサンプリングし、寒天培地に塗布した後、37℃で6日間培養し、コロニー数をカウントした。洗浄効果の検証では、蛍光色素1mLを十分に塗り広げ、紫外線照射下で消毒前後の画像を記録し、蛍光発色の面積を算出した。両検証で得られた結果について統計解析を行い、消毒効果および洗浄効果を検討した。また、外部機関による一般細菌培養検査では、スワブを用いて消毒前後の皮膚表面をサンプリングし、検出された細菌種を比較した。本研究は、岡山理科大学今治キャンパス動物実験管理部会の承認を受けて実施された。（承認番号：実2026-040）

結果

消毒効果の検証では、寒天培地を用いたコロニー数の比較において、ヒビスクラブ群およびヒビテン群ともに消毒前と比較して消毒後でコロニー数の有意な減少が認められた（ $p<0.05$, pre vs post）。洗浄効果の検証においても、両群ともに消毒前後での蛍光発色面積の有意な減少が認められた（ $p<0.0001$, pre vs post）。一般細菌培養検査では、全頭から消毒前に計5種類の細菌種が検出されたが、消毒後には検出されなかった。

考察

本研究では、ヒビスクラブ群およびヒビテン群のいずれにおいても、消毒前と比較して消毒後にコロニー数および蛍光発色面積が有意に減少し、十分な消毒効果および洗浄効果が認められた。また、外部機関による一般細菌培養検査において、全頭から消毒前に計5種類の細菌種が検出されたが、消毒後には検出されなかったことから、両製剤とも十分な消毒効果を有することが示された。以上より、今回の検証条件下では、界面活性剤含有クロルヘキシジングルコン酸塩と界面活性剤非含有クロルヘキシジングルコン酸塩の消毒効果および洗浄効果に明らかな差はなく、小動物の術野消毒において界面活性剤含有製剤を必ずしも選択する必要はないことが示唆された。開示すべき利益相反（COI）なし。

O-08 犬の血液生化学検査における小型分析装置アトライズVの有用性の検討

○ 安木 碧¹⁾ 沼田香澄¹⁾ 福島真琴¹⁾ 中村 唯²⁾ 長井和音²⁾ 近藤裕司²⁾ 石岡克己¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学臨床部門 2) ニプロ株式会社

序文

血液生化学検査は、全身状態を把握する上で重要な検査である。獣医療で使用されている一般的な血液生化学分析装置は据置型であり、主に病院内に設置されている。一方、アトライズは小型で持ち運び可能な血液生化学分析装置であり、ヒト医療において在宅医療など幅広い場面での活用が期待されている。近年、飼い主と犬猫の高齢化に伴い、通院が困難な動物に対する往診や在宅ケアの必要性が高まっている。在宅での診療やケアにおいては、持ち運びが可能で迅速に測定できる検査機器の活用が期待される。本研究では、犬の血液生化学検査における小型分析装置アトライズVの有用性を検討した。

材料および方法

本研究の対象は本学で飼育している犬 14 頭（健常犬および疾患犬）とした。絶食時に採血を行い、遠心分離後の血漿を直ちに測定した。使用した生化学測定機器はアトライズV（ニプロ株式会社）、比較対象に富士ドライケム NX 500V（富士フイルムVE Tシステムズ）を用いた。測定項目は、GLU, BUN, CRE, PHOS, CA, TP, ALB, AST, ALT, ALP, GGT, TBIL, TCHO, LIPA, AMY の全 15 項目とした。残余検体は-18℃で1週間凍結保存し、凍結保存が測定値に及ぼす影響についても検討した。統計解析は、Spearman の積率相関係数およびt検定を用い、 $p<0.05$ を有意とした（EZR, 自治医科大）。本研究は、日本獣医生命科学大学動物実験委員会の承認を受けて実施された（承認番号: 2026S-26）。

結果

アトライズVと富士ドライケムの測定値を比較した際、相関係数が0.90以上であった項目はGLU, BUN, PHOS, CA, TP, ALB, AST, ALT, ALP, TCHO, LIPA, AMY の12項目であり、PHOSを除き測定値間に有意差が認められた。CREは0.89とやや低く、同じく測定値間に有意差が認められた。GGTおよびTBILは測定下限を下回ったため解析できなかった。アトライズVにおける凍結後の測定値と、採血直後に測定した検体において、6項目で有意差が認められた。

考察

アトライズVと富士ドライケムの測定値において、全15項目中12項目で0.90以上の相関が得られ、良好な結果となった。CREの相関係数が低値を示した要因として、両機器における測定値の表示桁数の違いが統計解析に影響した可能性が考えられた。GGT, TBILは基準範囲の下限が測定範囲を下回っているため、本研究の対象犬では評価可能な測定値を得ることはできなかった。そのため、肝疾患犬などの検体で検討が必要であると考えられる。本研究より、いくつかの項目は追加で検討が必要であるが、小型分析装置アトライズVは往診や訪問看護にて有用であることが示唆された。また、凍結後の測定値では6項目において、採血直後と統計学的有意差が認められたものの、臨床的にはほぼ同等の結果であった。これより、採血後直ちに測定できない場合でも、検体を凍結保存することで採血直後と同等の測定値が得られることが確かめられた。開示すべき利益相反（COI）はなし。

O-09 猫血液型カード凝集法における全血検体と洗浄赤血球の判定比較

○ 中村知尋¹⁾・宇田川智野²⁾・近江俊徳²⁾

1) 公益法人日本小動物医療センター 臨床検査科

2) 日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学基礎部門

序文

猫のAB式血液型判定にはカード凝集法（以下、CARD法）やイムノクロマトグラフィー法（以下、IC法）など複数の検査法が用いられている。近年、特にAB型では検査法間で判定結果が一致しない症例が報告されている。一方、CARD法の添付文書では全血を用いることが推奨されているが（以下、全血CARD法）、洗浄赤血球を用いた判定が行われることもある（以下、洗浄CARD法）。しかし、その影響を検討した報告は少ない。そこで本研究では同一検体において、全血CARD法、洗浄CARD法およびIC法の判定結果を比較し、血球洗浄による検体前処理が血液型判定に及ぼす影響を検討した。

材料および方法

2023年2月から2024年5月までに実施したCARD法とIC法の比較研究で収集された症例のうち、洗浄CARD法でAB型と判定され、後日採取されたEDTA加血液の残余検体を利用可能であった5症例を対象とした。EDTA加血液を用いて、添付文書に従った全血CARD法、洗浄赤血球を用いた洗浄CARD法およびIC法による血液型判定を実施し、判定結果を比較した。洗浄CARD法では、生理食塩液を用いて赤血球を3回洗浄（2,000×g、5分）後、洗浄赤血球量の2倍量となるよう生理食塩液で再懸濁し、血球浮遊液を調製して血液型判定を行った。なお、IC法は添付文書に従い全血を使用した。

結果

全血CARD法では4例がA型、1例がB型と判定された。一方、洗浄CARD法では全5例がAB型と判定され、同一検体5例すべてで判定結果が変化した。参考として実施したIC法では2例がAB型、3例がA型と判定され、3法すべての判定結果が一致した症例は認められなかった。なお、判定に影響を及ぼす自己凝集は認められなかった。

考察

本研究では、同一検体であっても赤血球の洗浄操作のみを変更することでCARD法の判定結果が変化した。AB型では抗原発現が弱いことに加え、CARD法では検体条件によりB反応の偽陽性が生じる可能性が報告されており、本研究で認められたB反応については真の抗原発現を反映した可能性と、洗浄操作に伴う反応条件の変化による偽陽性の可能性の両方が考えられた。そのため、本研究は洗浄法の有用性を示すものではないが、同一検体を用いて前処理のみを変更してその影響を比較した点に意義がある。著者らが調べた限り、CARD法において検体前処理が判定結果に影響し得ることを示した初めての報告であり、今後は症例数を増やした検討や遺伝子解析を行い、検体前処理が判定結果に及ぼす影響についてさらなる検討が必要と考えられた。

本演題に関して、発表者の開示すべき利益相反はない。

○ 井上 もも・甲田 菜穂子

東京農工大学大学院

序文

日本では、獣医療の高度化や愛玩動物看護師法の施行により、動物病院が提供する診療やサービスは多様化している。これに伴い、飼育者が動物病院の特徴や診療内容を、事前に把握できる情報環境の整備が求められている。動物病院ウェブサイトは、そのための重要な媒体であるが、獣医療分野では発信内容に関する報告は限られている。本研究では、日本と同様に獣医療制度が全国で統一されており、動物福祉や広告規制の整備が進む英国を比較対象とした。動物病院ウェブサイトを比較調査し、今後の情報発信のあり方を検討するための基礎的知見を得ることを目的とする。

材料および方法

日本（500 件）と英国（200 件）の動物病院を対象に、ウェブサイトの有無、飼育者の要望を想定した調査項目（スタッフ紹介、診療内容、利用案内など）の記載状況を調査した。

結果

ウェブサイトを開設している動物病院は、日本は 368 件（74%）、英国は 180 件（90%）と英国が有意に多く、インターネットを活用した情報提供がより広く普及していた。スタッフ紹介について、英国は 8 割以上の動物病院ウェブサイトで、院長、勤務獣医師、愛玩動物看護師、受付など他のスタッフの各職種が掲載されており、チーム獣医療による診療体制が可視化されていた。一方、日本では、院長のみがほぼ全ての動物病院ウェブサイトに掲載されており、動物病院の印象が院長に大きく依存していた。専門性の提示について、日本は動物病院全体の専門分野を示す記載が有意に多く、英国では獣医師ごとの専門分野の記載が有意に多かった。予防医療の情報のうち、狂犬病予防の記載は日本の動物病院ウェブサイト、マイクロチップの記載は英国の動物病院ウェブサイトでは有意に多く、それぞれ飼育者の義務であることが反映されていた。疾患・症状の説明について、両国とも治療内容に関する説明は充実していたが、更新日、参考文献、対象動物など情報の信頼性を高める項目の記載は少なかった。利用案内のうち、受診時に必要な基本情報である診療時間、予約方法、アクセスは、両国とも 8 割以上の動物病院ウェブサイトに記載されていた。さらに、日本の動物病院ウェブサイトでは、ペット保険、休診日、駐車場、院内設備の記載が有意に多かった。英国では会員制度や健康プランなど継続利用を促すサービスに関する情報が多く掲載されていた。

考察

英国はウェブサイトの保有率が高く、情報発信を診療サービスの一部として積極的に活用していることが示唆された。またスタッフ紹介が充実しており、チーム獣医療体制が飼育者へ分かりやすく伝えられていた。さらに、動物病院全体の特色を伝える工夫が望まれる。一方、日本では院長を中心とした情報発信が特徴的であり、勤務獣医師や愛玩動物看護師ら、その他のスタッフの役割が十分に伝えられていない可能性がある。今後は、チーム獣医療の実践を可視化し、各職種の専門性や役割を積極的に発信することが求められる。両国に共通して、治療に伴うリスクや疾患説明の根拠となる情報は十分でなく、飼育者が適切な意思決定を行うための情報提供には改善の余地がある。動物病院ウェブサイトには、適切な根拠に基づく情報を掲載するとともに、診療内容を分かりやすく伝える工夫を進めることが、飼育者との信頼関係の構築やより良い獣医療コミュニケーションにつながると考えられる。

開示すべき利益相反なし。

訪問動物看護の実態調査 ー課題とターミナルケアについてー

○ 青木 はるか¹⁾・三井 香奈¹⁾

1) ヤマザキ動物看護大学 動物看護学部 動物看護学科

序文

近年、ペットの平均寿命の延伸に伴い高齢化が進行し、終末期ケア（ターミナルケア）の重要性が急速に高まっている。また、飼い主の高齢化や多忙化により頻繁な通院が困難なケースも多く、在宅で看護ケアを提供する「訪問動物看護」の必要性が指摘されている。しかし、その認知度や利用を妨げる要因、および「愛玩動物看護師」に期待される役割については十分に明らかにされていない。そこで本研究では、飼い主の訪問動物看護に対する認知や利用状況、ターミナルケアにおいて愛玩動物看護師に期待される役割を明らかにすることを目的とした。

材料および方法

全 20 問のアンケートを作成し、2026 年 6 月～7 月にかけて Google フォームによるインターネットでのアンケート調査を実施した。調査項目は、飼い主・ペットの属性、訪問動物看護の認知・利用経験・今後の利用意向、ターミナルケアにおける希望場所や動物看護師に期待する役割等とした。分析では各設問の単純集計・複数回答集計を行うとともに、訪問動物看護の利用経験の有無による認知や不安の差異を明らかにするため、カイ二乗検定を実施した。（承認番号：人 - 20260714-001）

結果

回答数は 54 件（利用あり 18 件、利用なし 36 件）であった。訪問動物看護の認知度は 39 件（72.2%）であったが、実際の利用経験は 18 件（33.3%）に留まった。しかし、今後の利用意向は「状況によっては利用したい 35 件（64.8%）」「利用したい 15 件（27.8%）」を合わせて 50 件（92.6%）に達し、高い潜在ニーズが確認された。ターミナルケアを希望する場所は「自宅」が 42 件（77.8%）と圧倒的多数を占めた。愛玩動物看護師に期待する役割（複数回答）では、「医療ケアの補助 42 件（77.8%）」「健康管理・症状観察 36 件（66.7%）」「介護技術 35 件（64.8%）」「飼い主への説明・相談対応 35 件（64.8%）」が高順位となった。

また、利用経験の有無による比較を行った結果、「訪問動物看護の認知度（ $P<0.01$ ）」「ターミナルケアの認知（ $P<0.05$ ）」「愛玩動物看護師の認知（ $P<0.05$ ）」において、利用経験あり群の認知度が有意に高い結果となった。一方、ターミナルケアに対する不安の有無については利用経験の有無による有意差は見られなかった。（ $P>0.05$ ）

考察

本研究の結果から、多くの飼い主が自宅でのターミナルケアを望んでおり、訪問動物看護に対する潜在需要は非常に高いことが判明した。一方で、利用経験がない層では訪問動物看護や愛玩動物看護師自体の認知率が有意に低いことから、サービスの存在や具体的なケア内容に関する情報発信不足が利用促進の障壁となっていると推察される。愛玩動物看護師は医療ケアの補助のみならず、介護技術や飼い主への説明・精神的サポートなど多岐にわたる役割が期待されている。今後は訪問動物看護の周知を図るとともに、在宅ターミナルケアにおいて家族に寄り添う専門職としての実践的役割を確立していくことが課題である。

開示すべき利益相反なし。

愛玩動物看護師の接し方が診察中の犬の 生理学的・行動学的指標に及ぼす影響

○佐藤 涼乃¹⁾・嶋本 里海¹⁾・小野寺温¹⁾

1) 帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科

序文

犬の平均寿命延伸と飼い主の意識向上に伴い、動物病院への期待は高まっている。先行研究では環境整備や家庭でのトレーニングによるストレス軽減の可能性が示唆されているが、診察中の具体的な「接し方」が与える影響は十分に解明されていない。そこで本研究では、愛玩動物看護師による接し方の違いが、診察中の犬の生理・行動学的指標に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

材料および方法

学科犬・家庭犬計 10 頭を対象に、介入・非介入の 2 条件（各 20 分）で実施した。5 分間の身体検査中、介入日には「話す・笑顔・撫でる」の 3 要素を加えた。指標として身体検査前後の発汗度・唾液中コルチゾール、検査中の RRI (RMSSD 算出) を測定した。また、ビデオ記録から姿勢や尾など 7 項目を行動スコア化した。これらの生理・行動学的指標の比較により、看護師の介入が診察中の犬に与える影響を評価した。

結果

解析の結果、RRI および行動スコアにおいて家庭犬と学科犬の間で有意差が認められた。RMSSD では 10 頭中 6 頭で非介入日より介入日に上昇傾向を示し、特に介入要素「話す」において数値の上昇が散見された。顔周りの行動スコアは、非介入日に比し介入日に 4 頭で上昇、3 頭で減少した。また、身体検査後の唾液中コルチゾール濃度は介入日に 3 頭で僅かな減少を認めた。一方、採血項目は検査前より介入日に有意に高値を示し、介入による生理・行動指標への影響には個体差が示唆された。

考察

診察中の介入有無による生理・行動学的指標に有意な差は認められず、愛玩動物看護師による介入が犬の過度な負担となる可能性は否定された。RRI および行動スコアの結果から、家庭犬に比し学科犬は心拍が安定し、低ストレス状態にあることが示された。これは、学科犬が日常的に診察台や白衣、身体検査等の刺激に接しており、環境や処置に対する「馴化」が成立していた影響と考えられる。個体別の指標変化に着目すると、介入日には RMSSD の上昇や、検査後の唾液中コルチゾール値の低下傾向が確認された。特に「話す」という聴覚的介入時や、顔周り等の犬が敏感で負担を感じやすい部位への処置時に、RMSSD の顕著な増加を示す個体が散見された。以上の結果から、愛玩動物看護師による積極的な声掛けや適切な接し方は、副交感神経を活性化させ、診察に伴う心理的・生理的ストレスを緩和させる有効な介入手法となる可能性が示唆された。特に、優れた聴覚を持つ犬にとって「話しかけ」は、不安を和らげる重要な要素であると考えられる。今後は、診察中のストレスを最小限に抑えられるよう最適な声掛けや触れ方の組み合わせを模索し、専門的な接し方を確立することが期待される。なお、開示すべき利益相反ない。

O-13 熊本県における猫白血病・猫免疫不全ウイルス感染の回顧的調査

○福留華梨¹⁾、黒田将仁¹⁾、吉川文香¹⁾、白石史絵¹⁾、大川恵子¹⁾、大杉剛生²⁾、徳田昭彦^{1) 2)}

1) 竜之介動物病院

2) 九州動物学院

序文

猫白血病ウイルス (FeLV) および猫免疫不全ウイルス (FIV) は、世界的に蔓延している重要なレトロウイルスである。本研究では、熊本県の竜之介動物病院における過去 13 年間の診療記録を基に、両ウイルスの感染状況およびその経時的推移を回顧的に調査した。

材料および方法

2013 年 1 月から 2025 年 12 月までの 13 年間に、竜之介動物病院を受診し、FeLV および FIV 検査を実施した熊本県内の猫 2,848 頭を対象とした。2013～2014 年は IDEXX スナップ・FIV/FeLV コンボ、2015 年以降はキャットラボ FeLV/FIV コンボを用いて検査を行った。FeLV および FIV 陽性率について、通年および年度別、性別 (未去勢雄、去勢雄、未避妊雌、避妊雌)、検査時年齢、死亡時年齢、居住地域別に解析した。

結果

対象猫 2,848 頭における FeLV 陽性率は 9.7%、FIV 陽性率は 16.8%であった。FeLV 単独陽性率は 6.4%、FIV 単独陽性率は 13.5%、FeLV/FIV 混合感染率は 3.3%であった。性別では、FeLV、FIV および混合感染のいずれも未去勢雄で最も高い陽性率を示した。平均死亡年齢は、FeLV/FIV 両陰性群 7.4 歳、FeLV 陽性群 4.5 歳、FIV 陽性群 6.6 歳であり、内訳は FeLV 単独陽性 4.5 歳、FIV 単独陽性 7.6 歳、混合感染 4.4 歳であった。年度別では、FIV 陽性率は全期間を通じて FeLV 陽性率を上回り、直近 2 年間はいずれも低下傾向を示した。また、FeLV および FIV 陽性率には居住地域による差が認められた。

考察

国内における既報の FeLV および FIV 陽性率は、それぞれ 2.9～22.3%、9.3～28.9%と報告されている。本調査で得られた FeLV 陽性率 9.7%、FIV 陽性率 16.8%はいずれも既報の範囲内であり、鳥取県および北海道オホーツク地域における大規模調査の結果とも概ね一致した。

一方、熊本県内では FeLV および FIV とともに熊本市周辺市町村で比較的高い陽性率を示し、地域的な集積が認められた。熊本県を含む西日本では SFTS (重症熱性血小板減少症候群) の発生が多く、SFTS 発症猫では FIV 抗体陽性率が 39.2%と高かったとの報告もある。このため、FIV 感染率の高い地域では、SFTS を念頭に置いた診療および飼い主への注意喚起が重要であると考えられた。

開示すべき利益相反なし。

○ 清水 夕貴¹⁾・晴山 綾香²⁾・佐伯 香織¹⁾・神田鉄平²⁾

1) 岡山理科大学 獣医学部 獣医保健看護学科 2) 同 獣医学科

序文

周麻酔期動物看護において、疾患や手術内容だけでなく動物種や体格、年齢に応じて周麻酔期合併症のリスクを予測することは、安全な麻酔管理を実践する上で極めて重要である。イヌでは年齢が麻酔関連死のリスク因子として知られており、近年では高齢犬に加え幼齢犬においてもそのリスクが高いことが報告されている。一方、低血圧や低体温といった具体的な周麻酔期合併症について、その発生率を年齢層別に検討した報告は限定的である。そこで本研究では、イヌの麻酔記録を回顧的に調査し、年齢が周麻酔期合併症の発生に及ぼす影響について検討することを目的とした。

材料および方法

2020年1月から2025年12月までに岡山理科大学獣医学教育病院を受診したイヌの麻酔記録を対象とした。組込基準は、手術を目的として全身麻酔が実施されたこと、気管内挿管後に吸入麻酔薬により麻酔維持されたこととした。対象となった麻酔記録から、年齢、性別、体重、ボディ・コンディション・スコア (BCS)、米国麻酔科学会全身状態分類 (ASA-PS)、総麻酔時間、投与薬物、手術内容および周麻酔期合併症として5分以上持続した徐脈、頻脈、不整脈、低血圧、低酸素血症、呼吸抑制、呼吸困難、無呼吸、低炭酸ガス血症、高炭酸ガス血症、低体温、高体温、喉頭反射、嘔吐、痙攣の有無を抽出した。抽出された症例を1歳未満 (幼齢群)、1歳以上8歳未満 (若齢群)、8歳以上 (高齢群) の3群に分け、各群での周麻酔期合併症の発生率および薬物投与の頻度を比較した。各調査項目の群間での比較には、クラスカルウォリス検定、ダンの多重比較検定、カイ二乗検定を用い、事後検定には偽発見率補正を適用した。ASA-PS、手術内容、BCSを共変量とした多変量ロジスティック回帰分析を行い、オッズ比 (OR) および95%信頼区間 (CI) を算出した。統計解析には、R (version 4.6.1) を使用し、 $p < 0.05$ を有意とした。

結果

組込基準を満たした599例 (幼齢群65例、若齢群187例、高齢群347例) が解析対象となった。幼齢群の体重は他の2群に比べて有意に軽かった。性別、BCS、手術内容およびASA-PSは3群間で異なる分布を示した。幼齢群および若齢群ではASA-PSクラス1、高齢群ではクラス2および3に有意な偏りが認められた。3群間での比較では、頻脈および低血圧の発生率に有意な差が認められた。ASA-PSおよび手術内容を共変量とした多変量ロジスティック回帰分析では、幼齢群では頻脈 (OR 7.12、95% CI 2.07–24.48) および低血圧 (OR 6.36、95% CI 2.31–17.51) のオッズ比が、高齢群では低血圧 (OR 2.43、95% CI 1.13–5.18) のオッズ比が若齢群と比較して有意に高かった。ASA-PS、手術内容およびBCSを共変量とした分析では、高齢群における低体温 (OR 2.53、95% CI 1.05–6.06) のオッズ比が若齢群と比較して有意に高かった。複数の薬物では3群間での投与頻度が有意に異なり、特にドパミンおよびドブタミンの投与頻度が高齢群で有意に高かった。

考察

本研究の結果より、年齢が複数の周麻酔期合併症の発生に影響することが明らかとなった。リスク因子としての年齢は、加齢に伴って変化する全身状態や疾患の有無とは独立したものであると示唆された。以上より、周麻酔期動物看護においては、年齢そのものが看護上の直接的な問題点になりうると考えられた。開示すべき利益相反なし。

O-15 本学における過去3年間の犬および猫の輸血症例の解析からみた 安全な輸血実施への取り組み

○塩見奈々¹⁾ 秋山鈴奈¹⁾ 早川典之¹⁾ 宮田拓馬²⁾

- 1) 日本獣医生命科学大学付属動物医療センター
- 2) 日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科臨床部門

序文

本学では年間80件以上の輸血を実施しており、血液型判定およびクロスマッチ検査の依頼は年間約230件に上る。また、本学にはいつ輸血症例が来ても素早く対応できるための輸血対応チームが設立されており、献血ドナーの要請や対応、血液在庫管理など安全に輸血を実施するために日々取り組んでいる。愛玩動物看護師が輸血に携わる機会が増えていく中、どのような症例が来院したら輸血を視野に入れるべきか、3年間の記録をもとに本学における輸血症例の傾向を紐解き、輸血を実施する際に注意すべき点を実際に起きた事例も交えながら、安全な輸血実施への取り組みを検証する。

材料および方法

本学において2023年度から2025年度の3年間に渡って依頼された血液型およびクロスマッチ件数、そして実際に輸血した症例を外科系と内科系で分類し傾向を解析した。血液型判定のみ行っている症例やクロスマッチ検査までして輸血をしなかった症例のカルテを遡り、輸血まで至らなかった背景等の情報を収集した。

結果

外科系では、術中輸血を要した症例として肝臓腫瘍切除、胆嚢摘出、脾臓摘出などが認められた。これらの症例では、初診時の段階で血液型判定を実施しているケースもあり、多くの場合は術前にクロスマッチ検査が実施されていた。また、患者動物が血液型DEA1.1(－)やB型に多い犬種や猫種の場合は輸血の必要性を考慮し早期に血液型判定が実施されている傾向があった。内科系では、腎臓科、消化器科、腫瘍内科で輸血症例が多く、入院中に貧血が進行し、複数回輸血を実施している症例もいた。中には、自己凝集を認めた症例やクロスマッチ検査で適合する血液がなく、輸血を断念した症例もいた。

考察

本学では、術前に血液型判定およびクロスマッチ検査を実施することで、輸血が必要となる可能性を早期に把握し、輸血対応チームによる献血ドナーの確保や輸血製剤の準備を計画的に進めることが可能となっている。このような事前準備は、緊急時に迅速な輸血を実施するためのリスクマネジメントとして重要であると考えられた。また、この体制を機能させるためには、主治医と愛玩動物看護師および輸血対応チーム間で適切な情報共有を行うことが不可欠である。さらに、輸血中は愛玩動物看護師が患者動物の状態を継続的に観察し、異常を速やかに獣医師へ報告することで、輸血副反応への迅速な対応につながり、安全な輸血の実施に寄与していると考えられた。

開示すべき利益相反なし。

O-16 トイ・プードルにおける垂直分力と歩行観察指標の関連性

○ 高橋 優¹⁾ 今村 伸一郎²⁾

1) ヤマザキ動物看護専門職短期大学 2) ヤマザキ動物看護大学

序文

犬の歩行機能評価において、垂直分力は跛行の評価や運動機能の指標として重要である。小動物医療では、歩行機能評価として動物用の床反力計による垂直分力の測定が、高額であるため限られた施設ではあるが用いられている。グレイハウンドを対象とした研究において、歩行時の肢の接地時間の変化が、垂直分力の変化に影響を及ぼすことが報告されている。犬種ごとの垂直分力に関する研究は散見されるが、特に小型犬の研究はまだ少ない。そこで本研究では、現在日本国内で最も飼育頭数が多く、かつ整形疾患が多いとされている小型犬であるトイ・プードルを対象に、歩行時の肢の接地時間および歩幅と垂直分力との間の関連性について調べた。簡便に観察可能である肢の接地時間や歩幅のような歩行指標が、垂直分力の低下を間接的に評価できる可能性について検討した。

材料および方法

床反力計VFP-Pro-W(ヒューテック株式会社)を用いた四肢の垂直分力と接地時間の測定を行い、動画解析ソフトICpro-3D(ヒューテック株式会社)を用いて歩幅の測定を行った。本研究では跛行がみられないトイ・プードル40頭を対象とした。統計解析はEZRソフトを用いて、垂直分力と接地時間、および垂直分力と歩幅の関係について、それぞれピアソンの相関係数および単回帰分析を行った。本研究は、ヤマザキ動物看護大学研究委員会の動物実験倫理審査の承認を得て実施した。(承認番号:20250512-001)

結果

前肢垂直分力と接地時間には有意な負の関連が認められ($r=-0.502$ 、回帰係数 $=-20.9$ 、 $R^2=0.25$ 、 $P<0.05$)、後肢でも同様に負の関連が認められた($r=-0.434$ 、回帰係数 $=-23.9$ 、 $R^2=0.19$ 、 $P<0.05$)。また、前肢垂直分力と歩幅には有意な正の関連が認められ($r=0.437$ 、回帰係数 $=14.8$ 、 $R^2=0.19$ 、 $P<0.05$)、後肢でも同様に正の関連が認められた($r=0.352$ 、回帰係数 $=12.2$ 、 $R^2=0.12$ 、 $P<0.05$)。さらに、前肢接地時間と歩幅の間にも有意な負の関連が認められ($r=-0.456$ 、回帰係数 $=-0.56$ 、 $R^2=0.21$ 、 $P<0.05$)、後肢でも同様に負の関連が認められた($r=-0.413$ 、回帰係数 $=-0.66$ 、 $R^2=0.17$ 、 $P<0.05$)。

考察

単回帰分析の結果から、接地時間および歩幅はいずれも垂直分力と有意な関連を示した。接地時間が長いほど垂直分力は小さくなり、歩幅が狭いほど垂直分力は小さくなることから、接地時間の延長および歩幅の減少は、四肢の機能的変化を反映していると考えられた。また、グレイハウンドを用いた先行研究と同様の結果が得られたことから、床反力計を用いない日常的な観察において、接地時間や歩幅の変化が垂直分力の変化傾向を示す指標となり得ることが示唆された。以上より、看護実践の場において簡便に観察可能な歩行指標が、患者の歩行機能低下を早期に把握する裏付けのあるスクリーニング指標として活用できることを意味するものである。床反力計を導入できない施設においても、愛玩動物看護師の観察によって犬の歩行状態を継続的にモニタリングし、運動器疾患の治療やリハビリテーションの早期介入に繋げることが可能になると考えられる。開示すべき利益相反なし。

O-17 健康犬における水中トレッドミル運動時の水温設定に関する検討

○ 河合 彩弥¹⁾・関 瀬利¹⁾・石岡 克己¹⁾・宮田 拓馬¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学臨床部門

序文

水中トレッドミル（水トレ）は浮力による荷重軽減や水の抵抗を利用した運動療法として臨床的に用いられている。水トレ運動では浮力や抵抗に加えて水温も生理応答に影響する可能性があるため、運動条件の一つとして生理応答を考慮した適切な水温設定を検討することが重要となるが、犬の水トレ運動における水温設定については十分に検討されていない。犬の遊泳運動時の水温差による生理学的影響を検討した先行研究を参考に、健康犬に対して水温 33℃で水トレを実施したところ、終了直後に直腸温の低下傾向を示し、振戦が認められた。そこで本検討では、健康犬に対して 33℃より高い水温 35℃および 37℃の条件で水トレ運動を実施し、これらの水温条件における生理応答を比較することで、水トレ運動時の水温設定について検討することを目的とした。

材料および方法

供試犬として本学獣医保健看護学臨床部門にて飼育管理している健康ビーグル犬および雑種犬 8 頭を使用し、実験前は 8 時間以上の絶食とした。水トレの水温は 35℃と 37℃の 2 条件に設定し、供試犬の大転子を基準とした水位で 1.5 km/h、20 分間歩行させた。測定項目はバイタルサイン（直腸温、心拍数、呼吸数）、血液化学検査（GLU、TG、TCHO、CK）、遊離脂肪酸（NEFA）、コルチゾール、酸化ストレスマーカー（d-ROMs、BAP）とした。また BAP/d-ROMs 比より潜在的抗酸化能の算出を行った。バイタルサインの測定は歩行直前、終了直後、1 時間後の計 3 回、採血は歩行直前、終了直後、1 時間後、1 日後、3 日後に実施した。統計は $P < 0.05$ で有意差ありとした。本研究は本学動物実験委員会および生命倫理委員会の承認（承認番号：2025S-2、S2025S-2）を得て実施した。

結果および考察

バイタルサインの変動は 35℃条件と 37℃条件で概ね共通しており、直腸温については終了直後に上昇傾向であった。また 37℃条件において終了直後から終了 1 時間後にかけて有意に低下した。体温に近い 37℃の水温では、運動によって産生された熱が水中へ放散されにくかった可能性があり、37℃で実施する際には、体温変化に注意する必要があると考えられた。GLU、TG および CK においては有意な変動は認められなかった。NEFA、コルチゾールは変動動向が概ね共通しており、終了直後に上昇、1 時間後以降は低下傾向を示した。TCHO は終了 1 時間以降において 35℃条件で上昇傾向、37℃条件で低下傾向を示し、運動後の脂質代謝あるいは脂質輸送の過程に水温条件が関与した可能性が考えられた。酸化ストレスマーカーは d-ROMs は 35℃条件で終了直後に上昇傾向を示した。BAP では有意な変動は認められず、BAP/d-ROMs 比は 35℃条件で終了直後以降に上昇傾向、37℃条件では低下傾向が認められた。これらのことから 35℃の方が酸化・抗酸化バランスが良好である可能性が示唆された。35℃は過度な冷却を避けながら熱放散も考慮できる水温で、運動後に脂質関連指標の遅発性変化が見られ、酸化・抗酸化バランスが回復方向へ推移した可能性があり、37℃は体表からの熱放散が相対的に小さくなる可能性のある水温で、脂質関連指標は 35℃とは異なる推移を示し、酸化・抗酸化バランスは比較的安定して推移した可能性がある。両水温条件はいずれも、健康犬において顕著な生理的応答を示さなかったが、35℃条件は、終了直後に体温低下を生じさせるべく、体温よりやや低い水温であることで熱放散も考慮できる実用的な水温設定と考えられた。

開示すべき利益相反なし。

一般演題（ポスター発表）

コアタイム 9月12日(土) 14:00～15:00

演題番号	演 題	演 者
P-01	猫におけるアシロマー協定の枠組みを用いた後ろ向き生存解析	村上 義樹
P-02	トイプードルにおける皮膚pH	茂木 彩名
P-03	ロンパースを利用した猫の手作り服の作製－ロンパースを用いた犬用服の応用－	百田 豊
P-04	愛玩動物看護師と獣医保健看護学科の学生における手指衛生遵守状況と手指清浄度の比較	生野 佐織
P-05	愛玩動物看護師科学生が実践する動物介在教育(AAE)－学生の学びと課題－	加藤 にこ
P-06	巻圧測定デバイス「まきよるone」を用いた静脈留置カテーテル固定における圧管理教育の有用性	佐伯 香織
P-07	経皮的吸引装置が犬に与える効果～股関節形成不全術後症例と関節炎症例の報告～	飯田 琳香
P-08	犬と猫の全身麻酔後の目覚める時間に関係する要因－院内の麻酔記録を使った分析－	細野 楓
P-09	高齢者施設におけるセラピードッグを用いた動物介在活動が施設スタッフに及ぼす心理的影響および活動認識	秋山 順子
P-10	札幌市及び近郊の訪問動物看護の依頼理由と疾患の調査	青山 友美
P-11	動物介在サービスを支える愛玩動物看護師の誕生をめざして－動物介在教育を基盤とした地域連携型実践教育プログラムの構築－	関口 順子
P-12	動物病院で用いられるイヌの保定技術に対する飼い主の抵抗感調査－エリザベスカラーは横臥位保定・口輪より飼主の抵抗感が少ない－	友野 悠
P-13	猫の飼い主の飼育開始時における情報取得実態～動物病院における情報提供の在り方検討～	フリッツ吉川綾
P-14	猫の適正飼養に関する実態調査	秋山 蘭
P-15	野生のホンセイインコにおける薬剤耐性菌の調査報告	阿部 仁美
P-16	要支援高齢者の動物飼育の現状についてのアンケート調査	川添 敏弘
P-17	人と動物の老々介護について－飼い主アンケートから見た高齢動物と高齢飼い主の課題－	田中 亜季

P-01 猫におけるアシロマー協定の枠組みを用いた後ろ向き生存解析

○村上義樹¹⁾・林英明¹⁾・川添敏弘¹⁾

1) 酪農学園大学 獣医学群 獣医保健看護学類

序文

国内の動物愛護管理統計は引取り数や譲渡数といった活動量の集計にとどまり、個々の動物の状態と収容中の判断を追うことができない。在所期間（length of stay : LOS）の長期化は収容能力を圧迫し、動物のストレスと疾病リスクを高める。どの個体群が LOS を長期化させるかを早期に予測できれば、戦略的な資源配分が可能となる。米国で策定されたアシロマー協定は収容動物を健康状態と行動特性から 4 群に分類する枠組みであるが、これを LOS の予測因子として評価した研究は限られ、国内での検証は行われていない。本研究では、この分類が LOS を予測しうるか検証した。

材料および方法

単一の地方自治体が運営する動物愛護管理センターの管理記録を用いた後ろ向きコホート研究である。2023 年 6 月 19 日から 2025 年 2 月 13 日までに収容された猫 426 頭を対象とし、獣医師 1 名がカルテと保管記録に基づき BC SPCA のガイドラインを参照して、Healthy (H 群)、Treatable-Rehabilitatable (TR 群)、Treatable-Manageable (TM 群)、Unhealthy & Untreatable (UU 群) に分類した。分類前に他団体へ移譲された 61 頭を除外し、365 頭を解析対象とした。主要評価項目は収容から退所までの時間とし、転帰の意味の違いは累積発生率関数 (CIF) で解釈した。群間差は Kruskal-Wallis 検定と Dunn-Bonferroni 法による事後比較、Kaplan-Meier 法とログランク検定、365 日に限定した制限付き平均生存時間 (RMST) で評価した。主要解析は Weibull 加速故障時間モデルとし、分類 (H 群を基準)、年齢、性別、不妊去勢手術の有無、毛色群、収容月を投入して時間比を求めた (欠測 7 頭と在所 0 日 12 頭を除く 346 頭)。

結果

解析対象 365 頭は H 群 119 頭、TR 群 138 頭、TM 群 97 頭、UU 群 11 頭であり、転帰は譲渡 314 頭、返還 4 頭、収容中死亡 20 頭、安楽死 2 頭、記録なし 25 頭であった。LOS の中央値は TM 群が 42.0 日 (四分位範囲 21.0-149.0) と最も長く、TR 群 25.5 日 (8.2-65.0)、H 群 17.0 日 (10.5-35.0)、UU 群 2.0 日 (1.0-5.0) であり、4 群間に有意差を認めた ($p<0.001$)。事後比較では TM 群が他の 3 群より有意に長く、UU 群は H 群と TR 群より有意に短かった。H 群と TR 群の差は有意ではなかった。Kaplan-Meier 法でも群間差は有意であり ($p<0.001$)、365 日時点の RMST は TM 群 121.3 日、TR 群 59.0 日、H 群 32.1 日、UU 群 3.0 日であった。Weibull 加速故障時間モデルでは、H 群を基準として TM 群の退所までの時間は 2.50 倍 (95%信頼区間 1.90-3.29)、TR 群は 1.67 倍 (1.30-2.13) と有意に長く、UU 群は 0.20 倍 (0.11-0.38) と有意に短かった。年齢は 1 歳増加ごとに 1.16 倍 (1.10-1.21) と、独立して LOS の延長と関連した。UU 群の短い在所は早期の非生存転帰を反映しており、CIF でも確認された。

考察

アシロマー協定の分類は、他の要因を調整後も LOS の独立した予測因子であった。TM 群は退所までの時間が H 群の 2.50 倍と長く、管理を要する医療的・行動的な問題を抱えた個体群が施設運営の主要な課題であることが示された。年齢も独立した因子であり、TM 群の譲渡の難しさには、医療的・行動的な問題に加えて高齢という不利が複合的に関与すると考えられる。入所後の早い段階で長期在所となりうる個体群を識別できることは、資源配分の基盤となる。本研究は単一施設の後ろ向き研究であり、UU 群が少なく、過去の記述を後から解釈する分類にバイアスが残る点が限界である。

開示すべき利益相反なし。

○ 茂木 彩名¹⁾・小笠原 美空¹⁾・三枝 優季¹⁾・阪井 来春¹⁾・佐藤 朋実¹⁾・伊藤 直之¹⁾

1) ヤマザキ動物看護大学 動物看護学部 動物看護学科

序文

皮膚は日常的に外界からの刺激やアレルゲンの侵入などを受けて炎症を引き起こす危険性があり、それらを防御する手段として様々なバリア機能が備わっている。その一つとして挙げられる化学的バリアの指標である皮膚 pH は、測定方法に侵襲性がないことから有用性が示されているが、比較の基盤となる皮膚トラブルのない犬や皮膚疾患に罹患した犬における皮膚 pH のデータは不足しているのが現状である。本研究では、国内で飼育頭数が多いトイプードルにおける皮膚 pH の基礎データをを得るため、トラブルのない 19 頭について測定を実施した。

材料および方法

供試犬は一般家庭で飼育され、グルーミング処置のため来校した肉眼的観察で皮膚病変のない臨床的に健康なトイプードル 19 頭（3-9 歳齢，雄：10 頭，雌：9 頭）について、皮膚 pH を測定した。pH の測定は、ガラス電極法装置（Skin & Scalp pH Tester, HANNA instruments）を用いて行った。測定部位は被毛が少なく、毛刈りを必要としないそれぞれ左右の腋窩部と鼠径部の計 4 カ所である。測定は各部位で 5 回実施し、平均値をその個体の代表値とした。

結果は中央値で示し、各測定部位（左右の腋窩部および鼠径部）における皮膚 pH の差および性別（雄および雌）、年齢（4 歳齢以下 9 頭および 5 歳齢以上 10 頭）による差について解析した。

なお、本研究はヤマザキ動物看護大学動物実験委員会の倫理審査で承認されたものである（承認番号：20260713-001）。

結果

各測定部位における皮膚 pH の中央値は左腋窩部 5.82，右腋窩部 5.84，左鼠径部 5.95，右鼠径部 5.88 であり、腋窩部と鼠径部の皮膚 pH はいずれも左右間や前後間による有意差は認められなかった。各部位別の性別による皮膚 pH は、左腋窩部では雄 5.66，雌 6.16，右腋窩部で雄 5.70，雌 5.94，左鼠径部で雄 5.92，雌 6.04，右鼠径部で雄 6.00，雌 5.86 であり、性別による差は認められなかった。

また、年齢別によるそれぞれの部位における皮膚 pH は、左腋窩部で 4 歳齢以下 5.82：5 歳齢以上 5.82，右腋窩部で 4 歳齢以下 5.87：5 歳齢以上 5.79、左鼠径部で 4 歳齢以下 5.95：5 歳齢以上 5.92，右鼠径部で 4 歳齢以下 6.02：5 歳齢以上 5.76 であり、年齢による有意差は見られなかった。

考察

化学的バリアの指標である皮膚 pH の変化は、犬アトピー性皮膚炎などで示され、病態との関連性が明らかにされている。

今回は腋窩部と鼠径部の皮膚 pH に有意差は見られず、同一の測定部位における性別や年齢による有意な差も認められなかった。

今後さらなる基礎データの集積によって、将来的に健康犬の腋窩部と鼠径部における皮膚 pH の基準値を設定できれば、視覚的に異常が確認できない症例であっても、皮膚 pH を測定することでバリア機能の異常を検出できる可能性があると考えられる。

ロンパースを利用した猫の手作り服の作製 ーロンパースを用いた犬用服の応用ー

○ 百田 豊¹⁾・田辺瞭¹⁾・谷口郁里¹⁾・中川実咲¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科

序文

小児用のロンパースを利用して犬の手作り服を作成した。それと同様の手順で猫に新しく手作り服を作製し、着用させた時の写真である。猫に犬用の手作り服を着用させると「動かなくなる」「脱いでしまう」などの問題が現れ、犬用の手作り服は猫に適さないことがわかった。

本研究では、猫の行動の自由を損なうことなく、前肢・後肢の患部を適切に保護できる長袖の洋服の改変を目的とした。

材料および方法

ロックミシン、カバーステッチミシン、裁縫道具、裁縫用マジックテープ、幼児用長袖ロンパース、伸縮性のある薄手の生地を使用した。「犬の手作り服」(上田,小池,島谷,2022)を参考に2枚の幼児用長袖ロンパースを縫い付けて猫用の洋服を作製した。作製した洋服は、犬用の長袖服(以下、犬服とする)、猫用の洋服(以下、猫服とする)3種類(前肢のみ長袖、後肢のみ長袖、四肢長袖)である。供試動物として4~10歳の猫5頭を使用し、犬服と3種類の猫服を着用させた。犬服と3種類の猫服において「動き」「着脱性」「脱げにくさ」の3項目を、5を良い、1を悪いとした5段階で評価し、5頭の合計で比較した。

結果

1犬服と猫服3種類を比較した結果、「動き」および「脱げにくさ」においては猫服が犬服よりも高く評価されたが、「着脱性」については犬服と猫服との間に差はみられなかった。

結果から、犬服よりも、猫の身体構造に合わせて作製した猫服3種類の方が猫に適しているといえる。猫服において「動き」および「脱げにくさ」の評価が高くなった理由として、首元に布を付け足したこと、後肢の袖を工夫したことの2点が挙げられる。首元に布を付け足すことで安定した着用状態を保持することが可能となり、後肢部分の袖の付け根を股関節の柔軟な動きを考慮した幅にしたことで猫の正常な動きを制限せずに洋服を着用できるようになったと考えた。

考察

犬服と猫服3種類を比較した結果、「動き」および「脱げにくさ」においては猫服が犬服よりも高く評価されたが、「着脱性」については犬服と猫服との間に差はみられなかった。

結果から、犬服よりも、猫の身体構造に合わせて作製した猫服3種類の方が猫に適しているといえる。猫服において「動き」および「脱げにくさ」の評価が高くなった理由として、首元に布を付け足したこと、後肢の袖を工夫したことの2点が挙げられる。首元に布を付け足すことで安定した着用状態を保持することが可能となり、後肢部分の袖の付け根を股関節の柔軟な動きを考慮した幅にしたことで猫の正常な動きを制限せずに洋服を着用できるようになったと考えた。

愛玩動物看護師と獣医保健看護学科の学生における 手指衛生遵守状況と手指清浄度の比較

○生野 佐織・山室 優芽・吉田 優月・小林 眞理子
日本獣医生命科学大学 獣医学部獣医保健看護学科

序文

医療関連感染対策において、手指衛生は感染伝播を防止するための最も基本的かつ重要な対策である。しかし、獣医療現場では手指衛生の遵守率や手指の汚染状況は十分に把握されておらず、手指衛生に関する研究も少ない。さらに、臨床経験の違いが手指衛生の実践やその効果に及ぼす影響については明らかになっていない。そこで本研究では、愛玩動物看護師と獣医保健看護学科の学生を対象に、手指衛生の実践状況、知識や意識を比較し、手指清潔度との関連について検討した。

材料および方法

本学付属動物医療センターに勤務する愛玩動物看護師 14 名（VNCA 群）および「動物看護総合実習」を履修している本学獣医保健看護学科 4 年次の学生 18 名（学生群）を対象とした。愛玩動物看護師は業務中に、学生は実習終了直後に調査を実施した。対象者には「普段どおりの手指衛生を実施してください」と指示し、手指衛生の方法については、通常の実践に従い各対象者の判断に委ねた。手指衛生の前後で手指表面の汚染度および生菌数を測定した。汚染度は、ルミテスターSmartを用いた A3 法により ATP を測定した。生菌数は、SCDLP 寒天培地を用いたスタンプ培養法により測定し、37℃で 48 時間培養後、形成されたコロニー数を計測した。手洗い中の様子は動画撮影を行い、手洗いの手順や所要時間などを評価項目としてスコア化した。さらに、WHO の手指衛生に関する質問票を参考に、知識・意識・実践に関する 18 項目の質問紙調査を実施した。有意差の検定については、手洗い前後での ATP および生菌数の比較には t 検定を用い、動画のスコアには Mann-Whitney の U 検定、アンケート調査には Fisher の正確確率検定を用い、有意水準は 5%とした。

結果および考察

VNCA 群では、ATP および生菌数はいずれも手洗い後に有意に減少した ($P<0.05$)。一方、学生群では ATP は有意に減少したが ($P<0.05$)、生菌数では有意な減少は認められなかった。動画解析による手洗いスコアは、VNCA 群の方が学生群より高い傾向を示したが、有意な差は認められなかった。このことから、両群の手洗い動作に大きな違いはなかったと考えられた。しかし、VNCA 群では生菌数が有意に減少したことから、動画では評価しにくい擦り洗いの正確さや圧のかけ方、すすぎの丁寧さなどの技術的な差が洗浄効果に影響した可能性が考えられた。さらに、一部の VNCA では、手洗い後に速乾性手指消毒薬を使用する様子が確認されたことから、手洗い技術の熟練に加え、速乾性手指消毒薬を併用する習慣も生菌数の減少に寄与した可能性が考えられた。アンケート調査においては、「速乾性手指消毒薬に関する知識」、「手荒れに関する知識」、「手指衛生への意識」に関する質問は、VNCA 群が有意に高い結果を示した。一方、「手指衛生に関する授業・実習を受けたことがある」と回答した割合は学生群で高かった。以上より、効果的な手指衛生の実践には、知識の習得だけでなく、臨床現場における反復的な実践と習慣化が重要であり、これらが手指衛生の質および遵守率の向上につながることを示唆された。

愛玩動物看護師科学生が実践する動物介在教育(AAE) ー学生の学びと課題ー

○ 加藤にこ¹⁾・関奈央¹⁾・高橋さくら¹⁾・田崎美羽¹⁾・木村侑実²⁾・日下真緒²⁾

関口順子³⁾・的場美芳子³⁾⁴⁾・柴崎妙恵⁴⁾・佐野葉子⁵⁾

1) 仙台 ECO 動物海洋専門学校 愛玩動物看護師科

2) 仙台 ECO 動物海洋専門学校 エコ・コミュニケーション科

3) 仙台 ECO 動物海洋専門学校 4) まとば動物病院 5) 東京福祉大学

序文

愛玩動物看護師には、適正飼養に関する啓発・指導における役割が求められている。本校では、「動物介在サービス論」を開講し、動物介在教育（以下、AAE）を学ぶ学生がプログラムの企画・実践を行っている。本研究では、学生が実施した2つのAAEプログラムを報告し、園児の参加状況と保育士へのアンケートから教育的効果を検討するとともに、学生への事後アンケートから運営上の課題を明らかにすることを目的とした。

材料（対象者）および方法

保育施設2か所を対象に、愛玩動物看護師科の学生が主体となり、活動適性評価を受けた学校犬数頭を活用してAAEを実施した。

訪問型では4～6歳児60名を対象に「口腔衛生と犬との関わり方」、来校型では5歳児14名を対象に「風鈴と犬の身体的特徴」をテーマとしたプログラムを実施し、園児の参加状況を観察した。

実施後、保育士にはAAEの認知度、教育効果、今後の実施希望、学生には準備、指導法、犬への配慮等についてアンケートを行い、教育的効果と運営上の課題を検討した。

結果

どちらの活動においても、はじめは緊張していた園児であったが、犬が同じ空間にいることを意識した配慮が見られ、犬を通した話題で学生や教員に話しかける様子が見られた。また、プログラム実施後の保育士に向けたアンケートでは、「動物介在教育という言葉が知らなかった」「また実施したい」「園児の楽しそうな姿が見られて良かった」という声が寄せられた。一方で、学生の事後アンケートからは、興奮状態にある園児への対応や、年中クラスに対する年齢に応じた柔軟なアプローチの難しさといった、実践的な指導面での課題が浮き彫りとなった。

考察

本プログラムは園児の集中力を高め、思いやりを育む効果に加え、現場での需要の高さが確認された。その一方で、園児への対応や誘導面での運営課題も明瞭となった。しかし、動物福祉を熟知した愛玩動物看護師が主体となり、保育士等と密に連携することで、動物への配慮と安全な指導を両立できると考える。今後は保育現場との協力体制を強化することで、幼児の豊かな心と社会性を育む体験型プログラムとして、より安全で教育的意義の高い展開が可能になることが示唆された。

介在動物の健康状態や行動を理解する愛玩動物看護師およびその養成課程の学生が関わることは、動物福祉に配慮した安全なAAEを実践するうえで意義がある。今後は、園児の理解度や行動の変化を客観的に評価する方法を導入し、プログラムの教育的効果を継続して検討していきたい。

利益相反の開示すべき事項はない。

巻圧測定デバイス「まきよる one」を用いた 静脈留置カテーテル固定における圧管理教育の有用性

○ 佐伯 香織¹⁾・下川愛莉¹⁾・望月陽菜¹⁾・平良彩名¹⁾・山下隼平²⁾・石橋卓実²⁾
古本佳代¹⁾・江藤真澄¹⁾・赤木徹也³⁾

1) 岡山理科大学 獣医学部 2) 岡山理科大学 大学院理工学研究科 3) 岡山理科大学 情報理工学部

序文

医療現場では、医療機器による圧迫に起因する医療機器関連圧迫創傷（Medical Device Related Pressure Injury : MDRPI）が問題視され、適切な圧管理が実践されている。一方、獣医療では MDRPI の概念が十分に確立されておらず、固定時にかかる圧（以下、巻圧）の基準や管理に関する教育も十分とはいえない。我々は、健常なビーグル犬の静脈留置カテーテル固定において、15 mmHg の巻圧では長時間の持続により局所循環に影響を及ぼす可能性を本学会第 32 回大会にて報告した。しかし、適正な巻圧を感覚のみで安定して再現することは容易ではない。そこで本研究では、巻圧をリアルタイムに数値化する装置「まきよる one」を開発し、その可視化と反復練習が学生の圧管理技術の習得に及ぼす影響と、教育ツールとしての有用性を検討した。

材料および方法

岡山理科大学獣医学部獣医保健看護学科 2 年生 24 名を対象とした。イヌのドール 6 体を用い、模擬血管下に「まきよる one」を配置して静脈留置カテーテル固定時の巻圧を測定した。目標巻圧は安全性を考慮して 10 mmHg 以下とし、1 回目は目標値を提示せず、2、3 回目は提示した上で固定を行った。測定後、「まきよる one」の手技習得への有用性、継続使用の必要性および自由記述によるアンケート調査を実施した。巻圧の比較には Friedman 検定および Dunn の多重比較検定（GraphPad Prism 11）を用い、有意水準は $P < 0.05$ とした。本研究は岡山理科大学人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：7-19）。

結果

巻圧は、1 回目 52.2 [14.3–124.2] mmHg（中央値 [範囲]）、目標巻圧提示後の 2 回目 7.49 [2.1–40.3] mmHg、3 回目 6.6 [1.8–21.3] mmHg であった。1 回目と比較して 2 回目および 3 回目では有意に低下した（ $P < 0.05$ ）が、2 回目と 3 回目の間に有意差は認められなかった。

測定後のアンケートでは、全員（100%）が「まきよる one」を手技習得に有用と評価し、うち 23 名（95.8%）が「とても役に立った」と回答した。また、全員が「まきよる one」を用いた学習を継続すべきと回答した。継続を支持する理由として、巻圧の数値化・可視化により自身の感覚と実際の巻圧との差を認識できることや、目標とする力加減の習得につながるなどが挙げられた。

考察

目標巻圧提示後に巻圧が有意に低下し、3 回目も同程度であったことから、巻圧の可視化により学生が自身の力加減を客観的に把握し、巻圧を目標範囲に近づけることが可能になったと考えられた。また、全員が「まきよる one」を手技習得に有用と評価したことから、数値によるフィードバックは、感覚に依存していた巻圧を客観的に理解し、安全性を意識した固定技術の習得を支援する教育手法として有用であることが示唆された。

本研究において、開示すべき利益相反はない。

経皮的吸引装置が犬に与える効果 ～股関節形成不全術後症例と関節炎症例の報告～

○ 飯田 琳香・高屋 純佳・谷内 愛美・中村 真綺・川村 和美

1) 帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科

序文

近年、動物についての利用が注目されている、経皮的吸引装置（メディセル）を用いた施術が、犬の股関節形成不全術後症例と関節炎症例に対してどのような効果が得られるのかを検証することを目的とした。

材料および方法

本校附属病院のリハビリテーションへ通っている右股関節形成不全のG・ピレニーズ(以降症例Aと表記)と関節炎のボーダー・コリー(以降症例Bと表記)を対象として行った。症例A、症例Bともに5分間の温熱実施後、症例Aは左後肢に30分間、症例Bは全身に30分間メディセル療法を行い、メディセル療法実施前後で表面温度の測定(サーモグラフィー使用)、関節可動域測定(ゴニオメーター使用)を行った。また、2症例とも初期(2回目)と後期(11回目)のリハビリテーション時の姿勢と歩様を比較した。

結果

メディセル療法の前後において7回の計測結果を比較し、症例Aは大腿部2.4℃、内股2.8℃、パッド2.8℃の表面温度上昇が見られた。症例Aでは左後肢の関節可動域すべてに拡大が見られた。症例Bでは後肢の屈曲以外に拡大が見られた。しかし、可動域は伸展と屈曲の差であるため数値的には拡大した。症例Bにおいてメディセル療法導入後は頭の位置が上がり、背湾姿勢にも改善が見られた。症例A、症例Bともに歩行の改善が見られた。

考察

表面温度を測定した大腿部、内股、パッドの3部位全てで上昇がみられたことからメディセル療法を実施することで血流や循環が良くなり、表面温度上昇につながったと考えられる。関節可動域では、測定箇所多くの部位で改善が見られたことから、血流の改善に伴い皮下の結合組織の滑走性・柔軟性が向上し、関節の可動性が上がったと考えられる。また、循環の改善は疼痛緩和にも作用していると考えられ、これらの複合的な作用が、歩行及び姿勢の改善に寄与したと考えられる。

開示すべき利益相反 (COI) について

本研究は、株式会社MJカンパニーより機器の提供を受けて実施された。

犬と猫の全身麻酔後の目覚める時間に関係する要因 —院内の麻酔記録を使った分析—

○ 細野楓¹⁾

1) 株式会社グリーンウェルネスサービス 久米川みどり動物病院

序文

犬や猫が全身麻酔から目覚めるまでの時間は、年齢や健康状態、麻酔時間、使用薬剤、体温、血圧などの影響を受けると考えられる。本研究では、院内に保存された麻酔記録を後ろ向きに解析し、覚醒時間と関連する要因を明らかにすることを目的とした。

材料および方法

院内で実施した犬および猫の全身ガス麻酔 186 件を対象とした。覚醒時間が記録されていた 176 件のうち、死亡または安楽死となった 2 件を除外した。必要項目がそろっていた 159 件について、麻酔時間、年齢、ASA 分類、動物種、昇圧薬使用、術中鎮痛法、体温低下量、最低平均動脈圧、最低心拍数、イソフルラン濃度と覚醒時間との関連を検討した。単変量解析に加え、各因子を同時に考慮した多変量解析を行い、同一個体の反復測定も考慮した。

結果

覚醒時間中央値は 20 分（四分位範囲 15～30 分）であった。多変量解析では、体温低下が 1℃増加するごとに覚醒時間は約 22%延長し（95%信頼区間：約 9～38%）、麻酔時間が 3 時間の症例では 1 時間の症例と比較して約 56%長かった（95%信頼区間：約 15～116%）。FLK（フェンタニル・リドカイン・ケタミンの CRI）使用症例では覚醒時間が約 30%長い傾向を認めたが、術式や麻酔時間の影響は区別できなかった。年齢、動物種、昇圧薬使用、フェンタニル使用、最低血圧、最低心拍数、イソフルラン濃度と覚醒時間との明確な関連は認められなかった。

考察

本研究では、麻酔中の体温低下が覚醒時間延長と最も安定して関連していた。また、麻酔時間が長い症例でも覚醒時間延長傾向を認めたが、術式や侵襲度などの影響を含む可能性がある。FLK 使用症例についても因果関係は明らかなではなかった。予測誤差は平均約 12 分であり、現時点で個々の症例の覚醒時間を高精度に予測することは困難である。今後は体重、術式、薬剤投与量・時刻、保温方法、経時的バイタル、抜管時刻などを統一して記録し、解析を進める必要がある。

開示すべき利益相反：なし

P-09 高齢者施設におけるセラピードッグを用いた動物介在活動が施設スタッフに及ぼす心理的影響および活動認識

○ 秋山順子¹⁾・加藤汐風海¹⁾・高崎由季乃²⁾

1) ヤマザキ動物看護大学動物看護学部 2) 昭和医科大学保健医療学部

序文

動物介在活動（Animal Assisted Activity: AAA）は、高齢者の心理的安定や社会的交流の促進に有効であることが報告されている。一方で、その効果は主に利用者を対象として検討されており、活動を支える施設スタッフへの影響に関する知見は限られている。介護現場では職員の心理的負担の軽減と職務満足感の向上が課題となっていることから、本研究では、高齢者施設におけるセラピードッグを用いたAAAが施設スタッフに与える心理的影響および活動に対する認識について検討した。

材料および方法

介護付き有料老人ホームAにおいて実施されているセラピードッグを用いたAAAを対象とした。活動に継続的に関与する施設スタッフ4名に対し、活動前後に唾液アミラーゼ活性の測定、VASを用いた主観的評価および行動観察を実施した。また、施設スタッフ3名に半構造化インタビューを行い、SCAT法を用いて質的分析を行った。さらに、量的データと質的データを統合して、活動がスタッフに与える影響について検討した。本研究は、ヤマザキ動物看護大学動物実験委員会ならびに人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号:人-20250624-002）。

結果

行動観察では、活動中から活動後にかけて表情や会話の増加が認められた。唾液アミラーゼ値は4名中3名で活動後に低下した。VASにおいても複数項目で改善傾向が示された。SCAT分析では、「活動に対する価値認識と肯定的感情の形成」「入居者の変化に対する感情的インパクトと専門的視点の深化」「安全確保と調整役としての責任意識」などのテーマが抽出された。スタッフは入居者の笑顔や普段とは異なる反応に価値を見出し、活動継続への満足感ややりがいを感じていた。一方で、活動継続には事故防止や個別対応への配慮が不可欠であり、安全管理に対する強い責任意識も示された。

考察

セラピードッグを用いたAAAは、施設スタッフに短期的なストレス軽減や気分改善をもたらす可能性が示された。さらに、スタッフは活動を通して入居者の変化や笑顔を再発見し、活動の価値を再認識するとともに、職務上のやりがいや満足感を得ていた。加えて、安全確保や活動調整に対する責任意識も強く示されており、AAAは単なるレクリエーションとしてのみならず、情緒的充足と専門職としての実践が共存する活動であることが示唆された。以上より、セラピードッグを用いたAAAは高齢者福祉のみならず、スタッフ支援や良好なケア環境の形成にも寄与する可能性がある。また、スタッフによる活動への理解と協力はAAAの円滑かつ継続的な実施を支える重要な要素であり、その実施基盤の形成にも寄与することが示唆された。これらのことから、AAAは動物と人との相互作用を活用した有用な福祉実践であると考えられた。

本研究において開示すべき利益相反はない。

○ 青山友美¹⁾・川添敏弘²⁾

1) わんにゃん訪問看護ぴりかのもり 2) 酪農学園大学獣医学群

序文

2024 年全国犬猫飼育実態調査¹⁾によると、犬猫の新規飼育率は横ばいになっており、猫ブーム後の飼育者減少傾向が落ち着いてきた状況にある。60~70 代の単身の飼育率は減少傾向、未婚親同居の飼育率は男女ともに減少または横ばいと報告されている¹⁾。このように、生活スタイルとペットとの関係性は変化し続けているが、そのなかで注目されている事象の一つに訪問動物看護がある。

2023 年以降、国家資格となった愛玩動物看護師が活躍するようになり、業務の幅が広がった。それに伴い、訪問動物看護における愛玩動物看護師のニーズや役割が広がり、単独でも可能な業務が増えると予測できる²⁾。そして、これまでに訪問動物看護に関する論文が数本であるが発表されている。その内容は、動物病院での獣医療の延長にある訪問動物看護を中心に現状と課題が調査されているが²⁻⁴⁾、利用者を対象としたニーズに関する調査は行われていない。そこで、近年の札幌市で訪問動物看護を希望している飼い主が利用しているペット訪問動物看護サービスについて後ろ向き調査を実施することとした。また、本研究に開示すべき利益相反はない。

材料および方法

わんにゃん訪問看護ぴりかのもりへの SNS や電話相談の記録、また訪問動物看護カルテを分析資料とした。期間は 2014 年 10 月 1 日から 2026 年 4 月 30 日までとし、「動物情報（疾患等）」「飼い主情報」「相談内容」ごとに Excel の sheet に分類し分析することとした。

結果

訪問動物看護を利用している方の多くは 60 歳以下で約 75%を占めていた。わんにゃん訪問看護ぴりかのもりでは、飼い主が留守の際にも対応しており、飼い主が不在になる理由は仕事や旅行が多く、飼い主の入院は 15%にすぎなかった。また、家族の介護や看護は 5%であった。動物種は犬 (55%)、猫 (40%)、ウサギ (5%) で、犬の平均年齢 13.6 歳、猫は 12.7 歳、ウサギは 7.9 歳と高齢の動物が多かった。救急対応が必要だったのは 5%に満たない数だったが、的確な判断と看護や獣医師対応が必要な場合もあった。対応した疾患は、犬では泌尿器系が最も多く、高齢疾患、神経疾患は同数であった。猫では、泌尿器系、内分泌系、悪性腫瘍が順に多くなった。ウサギの実数は少ないが、消化器と神経系の対応が多かった。

考察

札幌市およびその近郊で、訪問動物看護を行っている動物看護師の勤務実態をカルテから検証を行った。その結果、これまで語られてきた高齢者が主な対象ではなく、現役世代の活用が多かった。その内容も、出張や旅行を理由とするケースが多く、なかには疾患を理由にペットホテルに入れられないケースもあり、高いニーズがあると考えられた。それらの疾患の多くが動物病院で診療されている一般的な慢性疾患であり、高齢動物の飼育者が多く利用していた。今後は、統計分析により、より詳細のデータを提示していきたい。

参考文献

- 1) 日本ペットフード協会「全国犬猫飼育実態調査」：<https://petfood.or.jp/data-chart/>
- 2) 三井香奈ら：訪問動物看護の普及状況と今後の課題, *Veterinary Nursing*, 31(1), 1-4 (2026)
- 3) 花田道子ら：在宅看護への統合医療導入の有用性, *Veterinary Nursing*, 19, 1-8 (2014)
- 4) 三井香奈ら：地域における動物訪問看護のメリットとデメリット, *動物研究*, 23-32 (2022)

P-11 動物介在サービスを支える愛玩動物看護師の誕生をめざして ー動物介在教育を基盤とした地域連携型実践教育プログラムの構築ー

○関口順子¹⁾・的場美芳子¹⁾

1) 仙台 ECO 動物海洋専門学校

序文

2022 年に愛玩動物看護師法が施行され、愛玩動物看護師の業務には、愛玩動物の愛護・適正飼養に関する助言に加え、動物介在教育 (Animal Assisted Education : AAE) や動物介在活動 (Animal Assisted Activities : AAA) への支援も含まれる。一方、これらを包括する動物介在サービス (Animal Assisted Services : AAS) の実践者が、倫理、動物福祉、安全管理を体系的に学ぶ機会は十分とはいえない。幼児を対象とした AAE は、幼児が動物の愛護・適正飼養の基礎や犬の表情・行動の読み取りを学ぶ機会となると同時に、実施する学生にとっては対象者理解、介在犬の観察、安全管理、説明責任、地域連携を統合的に学ぶ場となる。そこで本校では、独自の選択科目として、AAE を基盤に AAS を支える愛玩動物看護師の育成を目的とした「動物介在サービス論」を構築した。

材料 (対象者) および方法

愛玩動物看護師科の専門教育および動物行動学を基盤に、倫理的判断、動物福祉・安全管理、介在犬の適性・ストレス評価、対象者理解、企画・リスク管理、多職種・地域連携を学修到達目標とし、講義、演習および実習からなる 1 回 90 分、全 16 回のシラバスを設計した。対象は、本講座を履修希望した愛玩動物看護師科 3 年生 4 名、エコ・コミュニケーション科 1 年生 1 名、同 3 年生 2 名の計 7 名となる。つばめの杜保育所、ちゃいるどらんどなないろの里こども園、および愛の家グループホームを実習協力機関とし、演習課題および実習により学習成果を評価した。

結果

学修到達目標に対応する全 16 回のプログラムを構成した。内訳は講義 7 回、演習 5 回、実習 4 回とした。講義では AAS 総論、倫理・動物福祉・安全管理、介在犬の適性・ストレス評価、多職種連携、AAE・AAA の対象者理解および企画・リスク管理を扱い、演習では企画立案、書類作成および広報を扱った。実習は介在犬の適性・ストレス評価 1 回、AAE 現場実習 2 回、AAA 現場実習 1 回とし、AAE では幼児への学習目標と介在犬の福祉・安全管理を含む企画立案から地域現場での実践までを段階的に配置した。演習課題および現場実習後に実施した履修者アンケートでは、犬の安全管理および動物福祉への配慮を意識して活動できたとの回答が多く得られた。一方で、支援対象者の理解に関しては課題が明らかとなった。

考察

本講座「動物介在サービス論」において AAE を基盤とする意義は、幼児に対する動物愛護・適正飼養教育と、学生に対する AAS 実践能力の育成を同一の地域実習で結び付ける点にある。本講座で学んだ未来の愛玩動物看護師が、AAS の単なる実施者ではなく、人・動物・環境を調整し、実施の適否を判断する役割を担うための基礎を身につけることができた。

今後は、受講前後の知識・態度、企画書、実習時の安全行動、連携先の評価および介在犬のストレス指標等を用いて、教育効果について継続して検討を進める予定である。

本研究において、利益相反の開示すべき事項はない。

P-12 動物病院で用いられるイヌの保定技術に対する飼い主の抵抗感調査 —エリザベスカラーは横臥位保定・口輪より飼主の抵抗感が少ない—

○ 友野 悠¹⁾・岡田 奈緒¹⁾・小野山 七海¹⁾・志賀 彩花²⁾・佐藤 絢夏¹⁾
五十嵐 輝月²⁾・フリッツ吉川 綾¹⁾・木村 祐哉^{1) 3)}
1) ヤマザキ動物看護大学 動物看護学部 動物看護学科
2) ヤマザキ動物看護大学 動物看護学部 動物人間関係学科
3) 日本大学 生物資源科学部 獣医保健看護学科

序文

動物病院では、イヌと獣医療スタッフ双方の安全を確保し、診療を円滑に行うために適切な保定が不可欠である。検査や処置では横臥位保定や口輪、エリザベスカラーを用いることがあるが、これらの保定によるイヌの外観の変化が飼い主に与える印象については十分に検討されていない。本研究では、保定方法がイヌの見た目に対する飼い主の認識や心理的受容に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

材料および方法

2025年11月1日、2日にヤマザキ動物看護大学文化祭へ来場した、体重10kg未満のイヌとその世話をを行う主たる飼い主を対象とした。飼い主の同意を得た後、イヌに横臥位保定、口輪装着、エリザベスカラー装着を実施して側面写真を撮影し、各写真を提示して保定方法に対する抵抗感を5件法で評価した。併せて、質問紙で飼い主の基本属性、イヌへの愛着度およびC-BARQによるイヌの行動特性を調査した。抵抗感の比較にはFriedman検定およびBonferroni法による多重比較を用い、各保定方法に対する抵抗感を目的変数とした重回帰分析を実施した。有意水準は5%とした。

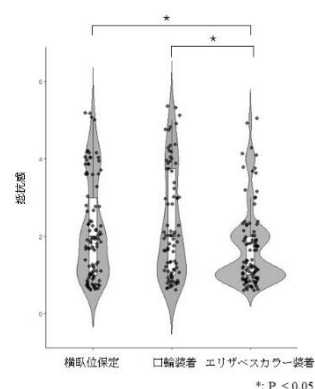
本研究はヤマザキ動物看護大学研究倫理審査委員会およびヤマザキ動物看護大学動物実験委員会による承認を受けて実施した。（承認番号：第人-20250905-001、20250902-001）

結果

91名の飼い主と102頭のイヌを解析対象とした。口輪装着および横臥位保定に対する抵抗感は、エリザベスカラー装着と比較して有意に高かった（図）。重回帰分析では、横臥位保定および口輪装着に対する抵抗感は、飼い主が認識するイヌの分離不安傾向と有意に関連した（いずれも $p < 0.05$ ）。一方、エリザベスカラー装着に対する抵抗感と有意に関連する因子は認められなかった。

考察

エリザベスカラー装着と比較すると、口輪装着および横臥位保定は飼い主の抵抗感が高く、これらの保定方法が強い身体拘束を想起させている可能性が示唆された。特に、イヌの行動を大きく制限する保定方法は、飼い主に心理的な負担を与えやすく、抵抗感が高くなることが考えられる。また、分離不安傾向を強く認識する飼い主ほど横臥位保定や口輪装着への抵抗感が高かったことから、イヌの情緒的特性に対する飼い主の認識が保定への抵抗感に影響する可能性が示された。以上より、獣医療スタッフは保定の必要性を説明するだけでなく、イヌへの配慮やストレス軽減のための取り組みについても十分に説明し、飼い主の理解を得ることが重要である。また、イヌの状態に応じて必要最小限の保定を行う姿勢を伝えることで、飼い主の不安や抵抗感の軽減につながる可能性があると考えられた。開示すべき利益相反：なし。



猫の飼い主の飼育開始時における情報取得実態 ～動物病院における情報提供の在り方検討～

浅井はるか¹⁾・岩ヶ谷奈月¹⁾・笹野美樹¹⁾・松井匠作¹⁾・○フリッツ吉川綾¹⁾

1) ヤマザキ動物看護大学 動物看護学部

序文

猫の心身の健康を維持するためには、適切な飼養環境を整えることが重要であり、AAFP・ISFM は 2013 年に「猫の環境ニーズに関するガイドライン（5 つの柱）」を提唱した。しかし、飼育開始時に飼い主がどのような情報を取得し、どのような情報源を利用しているかは十分に明らかになっていない。そこで本研究では、猫の飼育開始時における情報取得の実態を把握し、動物病院における情報提供の在り方について検討した。

材料および方法

本研究はヤマザキ動物看護大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：人-20240906-001）。リサーチ会社を通じてアンケート調査を実施し、対象は 18 歳以上で主に猫の世話をしている飼い主とした。調査項目は、猫の基本情報（感染症予防歴、問題行動など）、飼養管理（「5 つの柱」に基づく実施状況など）、飼育開始時の情報取得（内容、情報源、取得方法など）およびそれらに対する飼い主の認識とした。情報取得状況と問題行動、感染症予防および飼養管理との関連を検討した。

結果

有効回答数は 127 件であった。問題行動は 45.7% で認められ、「動物病院を怖がる」が最も多かった。飼育開始時に情報提供を受けた者は 93 件で、情報源は動物病院が最多（49 件、52.7%）かつ最も信頼性が高いと評価された。情報提供手段は口頭説明が最多（37 件）であった。一方、自ら情報を探索した者は 86 件で、情報源はインターネットが最多（75 件）であった。

入手した情報は病気の予防が最も多く、「5 つの自由」に関する情報はいずれも 65% 以上が入手していた。一方、キャリートレーニングおよび防災対策に関する情報は少なかった。また、病気の予防の重要性は最も高く認識され、キャリートレーニングは最も低かった。「5 つの柱」では、第 2 の柱は認識・実践度ともに高く、第 5 の柱はいずれも低かった。

Fisher の正確確率検定の結果、動物病院から情報提供を受けた群では感染症予防の実施項目数が有意に多かった（ $p=0.010$ ）。一方、問題行動との関連は認められなかった。

考察

動物病院は飼育開始時における主要な情報提供源であり、感染症予防の実施に寄与している可能性が示された。一方、キャリートレーニングや「5 つの柱」の一部に関する情報は十分に普及しておらず、問題行動との関連も認められなかった。したがって、動物病院では予防医療に加え、猫の行動学や適切な飼養環境に関する情報提供を充実させることが重要と考えられた。

開示すべき利益相反なし

○ 秋山 蘭¹⁾・伊藤 史歩理¹⁾・津村 莉玖¹⁾・藤澤 美月¹⁾・水越 美奈¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科

序文

近年、日本では猫の室内飼育率が大幅に増加し、完全室内飼育が一般的である。室内飼育は、望まない繁殖の抑制、感染症の予防、交通事故防止などのメリットをもたらし、猫の平均寿命の延伸にも寄与している。その一方で、猫を飼育する家庭内環境において、適正飼養に必要な知識を飼い主が十分に持たない場合、猫のストレス、肥満、問題行動などの新たな課題が生じる可能性がある。そこで、本研究では、猫の飼い主を対象として、適正飼養の普及に向けた飼い主への指導内容を検討するため、猫の飼育実態に関するアンケート調査を実施した。

材料および方法

アンケートの対象者は、現在猫を飼育している飼い主とした。複数頭飼育している場合には、飼育中の最年長の猫について回答を依頼した。アンケートは web および紙面にて行い、調査期間は 2025 年 6 月 11 日～同年 7 月 25 日までとした。アンケート内容は、飼い主および猫の基本的情報、飼育頭数、飲水用食器やトイレをはじめとした猫用品の設置・使用状況、食事管理に関する項目で構成した。統計解析はカイ二乗検定を用い、 $p<0.05$ を有意差有りとした。なお、委員会の承認番号においては、本学の規定ではアンケート調査は倫理審査の対象外であり、承認番号は付与されていない。

結果・考察

回答数は 137 件であり、有効回答数は 112 件(81.8%)であった。飼い主の猫飼育年数は 10.9 ± 9.0 年、猫の年齢は 8.3 ± 5.3 歳であった(mean $\pm$ SD)。飲水用食器およびトイレの設置数については、飼育頭数と同数を設置している飼い主が最も多かった。American Association of Feline Practitioners および International Society of Feline Medicine のガイドラインでは、「飼育頭数+1 個以上」の設置が推奨されているが、この基準を満たしていた飼い主は、飲水用食器で 30.4%、トイレで 32.1%にとどまった。このことから、適切な飲水用食器およびトイレの設置数に関する認識が十分に浸透していない可能性が示唆された。また、引っ掻くことができる用品、高所へ登ることができる用品、隠れることができる用品の設置も推奨されている。引っ掻くことができる用品の設置率は 95.5%と最も高かったが、これら 3 種類の猫用品の設置数は、多頭飼育家庭の方が単頭飼育の家庭よりも有意に多かった(カイ二乗検定, $p<0.05$)。被毛用ブラシの使用状況では、被毛の長さ別にスリッカーブラシの使用状況を比較したところ、有意差は認められなかった(カイ二乗検定, $p>0.05$)。しかし、短毛種の 57.1% がスリッカーブラシを使用しており、被毛の長さに応じた適切なブラシの選択およびブラッシング方法の指導が必要であると考えられた。さらに、猫の飼育年数が 5 年以下と 6 年以上の飼い主との間で、主食の給与量の決定方法を比較したところ、有意な関連が認められた(カイ二乗検定, $p<0.05$)。飼育年数 6 年以上の飼い主では「特に決めていない」と回答した割合が高く、5 年以下の飼い主では、「パッケージに記載された量」等を参考にしている割合が高かった。飼育経験の長い飼い主ほど、経験的に給与量を決定している可能性が考えられた。

これらのことから、飼育環境やグルーミング方法、食事管理において、改善すべき課題が認められた。猫の適正飼養の普及には、獣医療者による積極的かつ継続的な指導・啓発の重要性が示唆された。開示すべき利益相反なし。

○ 阿部 仁美¹⁾, 渡辺隆之¹⁾

1) 帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科

序文

薬剤耐性菌の増加は、ヒトおよび動物の医療現場で世界的な問題となっている。ヒトや動物の糞尿で汚染された河川、土壌等の環境は、薬剤耐性菌や耐性遺伝子のリザーバーとなる。野生動物は、環境中に薬剤耐性菌を拡散させる可能性が指摘されている。ヒトの近い環境で生息する野生動物は臨床的に重要な抗菌薬に対する耐性菌を保有しやすいことが報告されている。

ホンセイインコ *Psittacula krameri* は、1969-1970 年にかけて動物卸売業者の荷下ろし時の事故により一度に大量の羽数が逃げ出し、1969 年に東京都で初記録された後、各地に広がった。現在は、主に東京都、神奈川県、埼玉県および 100 羽に満たない羽数が千葉県、群馬県で観察されているのみである。本種は、生態系被害防止外来種リストにおいて「その他の総合対策外来種」としてリストアップされ、生息地拡大が懸念されている。本種は時に 1000 羽を越える大きなねぐらを形成することがある。これまでに報告されているねぐらは、いずれも人間社会と隣接して存在するため、これらの病原体の実態を把握することは、人間社会における野生動物生息地の衛生管理を考える上で重要である。そこで本研究では、ホンセイインコにおける薬剤耐性菌の保有状態について基礎的な情報を得ることを目的とし、本種のねぐらにて糞便を採取し、薬剤感受性試験を行った。

材料および方法

2023 年 12 月 25-26 日に神奈川県・東京都周辺を利用する個体のねぐら、群馬県内の神社から得た糞便を供試験体とした。供試験体は、DHL 培地に塗布後、釣り菌、クローニング後、16SrDNA で菌種同定を行った後、VITEC で感受性試験を実施した。

結果

Acinetobacter, *Aeromonas caviae*, *Pseudomonas*, *Pseudomonas putida*, *Pseudomonas massiliensis*, *Hafnia alvei*, *Enterobacter*, *Enterobacter cloacae*, *Escherichia coli* を検出したが、地域差は見られなかった。*Enterobacter*. および *Escherichia coli* 以外から、ペニシリン系およびセフェム系第 1-2 世代、TS 合材の耐性菌、一部からセフェム系第 3 世代、モノバクタム系の耐性菌を確認した。

考察

本種から検出された細菌の多くは水生の環境菌であった。本種に限らず、鳥類は雨水、水たまりならびに河川などで水分摂取をするため、生活サイクルの中で環境中に残存する抗生物質を摂取したと考えられる。本種は種子食であるものの、カキ、みかんならびにビワなどの果実も採餌している。そのため農業被害も懸念されている。しかし、本研究において農薬に利用されるアミノグリシド系、テトラサイクリン系の薬剤耐性菌は確認されなかった。したがって、本種が摂取していた果実は農地由来でないことが示唆される。本種のねぐらは公園や住宅地といった人々にとって身近な場所で報告されているため、必要に応じて公衆衛生に考慮した近隣住民への啓発が必要となる。獣医学、公衆衛生学、鳥の生態について学んだ地域に詳しい専門家からの啓発が効果的だと考える。

○ 川添 敏弘・菅原 真帆・林 英明・村上 義樹

酪農学園大学 獣医学群 獣医保健看護学類

序文

高齢化が進む日本において、高齢者と動物のふれあいは心身の健康維持や生活の質の向上に寄与している。精神的安定や身体機能の維持、周囲との交流促進、生活リズムの確立など多くの利点が指摘されている。一方で、高齢者の体力や判断力の低下、社会的孤立などを背景に、飼育能力を超えて動物が増加する多頭飼育崩壊が深刻な課題となっている。発生時には衛生環境の悪化、近隣トラブル、動物の健康被害を招き、対応が必要なケースが全国で生じている。実際に北海道でも、動物を飼育している独居高齢者が、認知・身体機能の低下から経済的困窮と室内悪化に至った事例が報告されている。

こうした問題の最前線にあるのが地域包括支援センターである。同センターは高齢者の生活を包括的に支える窓口だが動物飼育は直接の担当領域ではない。しかし、動物が取り残されるなどの状況が生じた場合には、動物愛護管理法の視点からの支援をしなければならず課題が存在する。

行政や団体は多頭飼育崩壊の予防に取り組んでいるが、北海道における高齢者の動物飼育状況や、地域包括支援センターが受ける相談の実態は明らかになっていない。そこで本研究は、地域包括支援センターを対象としたアンケート調査を実施し、高齢者の動物飼育の現状や支援に関する課題を明らかにすることを目的とした。また、本研究に開示すべき利益相反はない。

材料および方法

本研究では北海道内の地域包括支援センター（279カ所）を対象に、QRコードを記載したハガキを郵送することで実施した。犬猫を飼育している現場を担当したことがあるか、現場にいた犬猫の数や担当件数、飼育者の生活環境、犬猫の状態、飼育者の特徴、動物の問題が生じている際に連携する機関、動物関連で困ったことがある状況について選択と記述式で質問した。

結果

有効解答率44%であった。犬猫を飼育している現場の担当経験者が92%存在し、その多くが複数の家庭を担当していた。不衛生な環境で犬猫の飼育をしている家を76%が担当しており、その内容は臭いや汚れ、排泄物の放置や抜け毛などであった。手伝いを依頼された内容として、猫のトイレ掃除やペット用品の買い物、餌やり、散歩が多かったが、多様な依頼内容が確認できた。犬猫が汚れているケースが多く、痩せている個体が25%ほど存在していた。また、担当家庭の多くが動物病院での健康診断を受けていなかった。飼い主の認知力の低下は38%ほどに認められ、経済的に豊かな人は少数であった。また、多くの方のQOLには課題があることも分かった。

考察

本研究から、地域包括支援センターの多くの職員が高齢者のペット飼育に関する問題に直面し、解決策を求めていることが分かった。動物飼育は高齢者の心身に好影響を与える一方、動物の世話は介護保険外のため、衛生悪化や多頭飼育崩壊などを招くリスクのある状況も理解できた。動物飼育の単純な制限ではなく、適切な飼育支援体制の構築が必要であることが分かった。

解決には、福祉部門と動物愛護団体や看護師、ボランティアが連携し、行政が関与する新たな支援体制が求められると考えられた。早期から適正飼育（頭数管理や避妊去勢）の啓発や見守りを行うことで、孤立防止と多頭飼育崩壊の予防につながることは明白であり、センター職員へのサポートと地域全体での連携と介入が重要だと考えられた。

人と動物の老々介護について ー飼い主アンケートから見た高齢動物と高齢飼い主の課題ー

○ 田中 亜季¹⁾

1) 久米川みどり動物病院（東京）

序文

近年、犬猫の高齢化とともに飼い主自身の高齢化も進み、「人と動物の老々介護」が社会的課題となっている。高齢動物では慢性疾患や認知症、介護を必要とする症例が増加する一方で、高齢の飼い主は通院や日常管理、介護そのものに身体的・精神的負担を抱えることが少なくない。本研究では、当院で実施した飼い主アンケートをもとに、動物の年齢、飼い主年代および相談内容の関連を分析し、人と動物の老々介護の現状と今後求められる支援について検討した。

材料および方法

対象は当院で実施したアンケート回答 61 例とした。調査項目は動物種、年齢、飼い主年代および日頃の悩み・相談内容等とした。

動物の年齢は 0～6 歳、7 歳～からは 2 年刻み、21 歳以上のライフステージに分類し、相談内容は「食事・食欲」「高齢・介護・認知症」「行動・しつけ」「散歩・運動」「排泄」「病気・健康管理」などに分類した。また、動物の年齢と飼い主年代を組み合わせ、相談内容との関連について集計・解析した。

結果

対象の 85.2%が犬、14.8%が猫であった。

動物の年齢は 11 歳以上が 32 頭(52.5%)と半数以上を占め、飼い主年代では 50 代が 24 名(39.3%)と最も多く、次いで 60 代 13 名(21.3%)、40 代 11 名(18.0%)であった。

相談内容では、「食事・食欲」が 14 件(13.7%)と最も多く、「高齢・介護・認知症」12 件(11.8%)、「行動・しつけ」11 件(10.8%)、「散歩・運動」10 件(9.8%)、「排泄・トイレ」9 件(8.8%)、「病気・健康管理」8 件(7.8%)であった。

年齢別では、0～6 歳では吠えや噛み癖などしつけ相談が中心であったが、7～10 歳では食ベムラや分離不安、散歩や運動不足など生活習慣に関する相談が増加した。11～14 歳では食欲低下、トイレの失敗、関節疾患、視力や口腔のトラブルなど加齢に伴う相談が多くなり、15 歳以上では認知症、夜鳴き、腎臓病、排泄障害、介護、通院負担などハイシニア特有の相談が中心となった。

飼い主年代との関連では、30～40 代ではしつけや留守番、行動管理に関する相談が多かった一方、50～70 代ではシニア・ハイシニア動物を飼育する割合が高く、食欲低下、慢性疾患、介護、認知症に加え、訪問診療や一時預かりなど生活支援に関する要望も認められた。

考察

本調査では、11 歳頃を境に相談内容が「しつけ・生活習慣」から「健康管理・介護」へと大きく変化することが確認された。また、シニア・ハイシニア動物を飼育する飼い主の多くは 50～70 代であり、動物の高齢化と飼い主自身の高齢化が重なる「老々介護」の状況が示唆された。

今後は、11 歳より前に介護予防やフレイル予防として当院でも行っている若いときからの運動をしてもらうサービスを目的とした情報提供を行うとともに、実際に悩まれている栄養管理、排泄ケア、認知症への対応、また、高齢動物だけでなく通院負担や介護負担が大きいとされる高齢飼い主も支援対象とした包括的な獣医療体制を構築することが、「人と動物の老々介護」を支えるうえで重要であると考えられた。開示すべき利益相反なし。

抄録広告協賛企業一覧 (50 音順 敬称略)

株式会社 ANCHORS

株式会社学窓社

帝京科学大学

一般社団法人日本愛玩動物看護師会

株式会社ファームプレス

VCA Japan 合同会社

ペットコミュニケーションズ株式会社

学校法人ヤマザキ学園

ロイヤルカナン ジャポン合同会社

WEB および動画広告協賛企業一覧 (50 音順 敬称略)

株式会社 ANCHORS

日本ペットフード株式会社

株式会社ファームプレス

VCA Japan 合同会社

寄付協賛企業一覧 (50 音順 敬称略)

日本ビスカ株式会社

株式会社 PEPPY

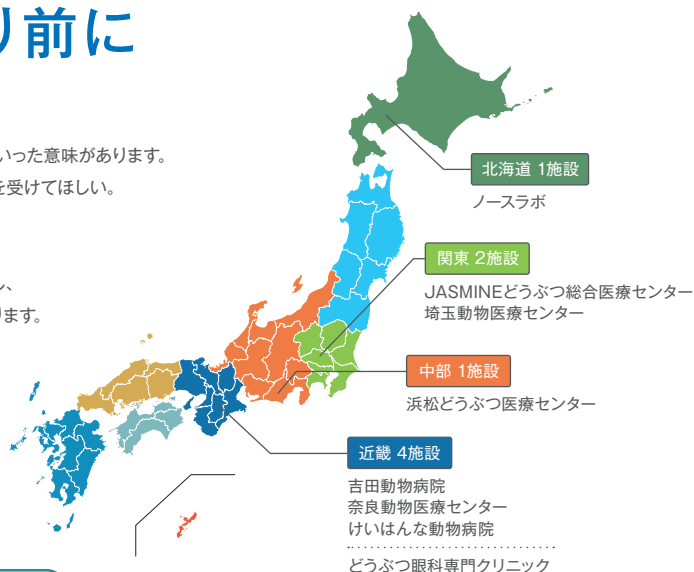
学校法人宮崎学園 大阪ペピイ動物看護専門学校

動物のいのちに寄り添う 安心して、頼れる医療を当たり前

ANCHOR (アンカー) の英語の意味には、船が停泊する時の「錨で固定する」という意味のほかに、「深く結びついている」「(心などを) 繋ぎ止める」「心の拠り所・支え」「頼みの綱」「アンカー走者」といった意味があります。動物はわたしたちの人生を豊かにしてくれる家族の一員です。だからこそ、安心して頼れる医療サービスを受けてほしい。特に二次診療の分野においては、需要が高まる一方で、供給不足が続いています。わたしたちは専門診療に強みを持った動物病院を目指しており、さまざまなANCHORSグループの取り組みをみなさまに知って頂くことで、同じ想いを持つ仲間を増やし、将来的には「アジアを代表する専門的综合動物医療グループ」を形成し、獣医療の発展に貢献してまいります。



Animal Care Hospital and Referral centers



登録無料

▼ ANCHORS動物病院未来研究所登録のススメ ▼

獣医療に関わる全ての方へ情報配信しております。この機会に是非、ご登録ください。

対象：獣医療従事者【獣医師・（愛玩）動物看護師・スタッフ・獣医療系学生など】

「ライブラリー」新設

臨床現場でご活用いただける獣医療セミナーを「ライブラリー」にて何度も見返してご視聴できるようになりました！



2024.10.15日・11.15日



2025.9.10日・10.10日



7月22日Q~8月25日Q



2025.9.18日・10.18日



2023.10.5(木) 18:00~21:00

※ライブラリー内のセミナーは適宜更新、追加掲載されます。

- ANCHORS主催のセミナー（獣医療・経営に関することなど）
- スキルアップのための獣医臨床情報
- 動物病院の経営に関する情報
- 各グループ動物病院から配信しているセミナー
- 一息つける温かいメッセージ（Instagram）

登録はこちらから！



<https://anchors-vet.co.jp/contents/>

登録方法



STEP.1
TOPページ
右上の
SIGN IN
をクリック



STEP.2
「新規登録」を
クリック

STEP.3
会員登録フォームに
ご記入いただき
確認後、「送信」で
登録完了です。



愛玩動物看護師のための

お悩み相談ルーム

監修：木村祐哉

渡邊力生

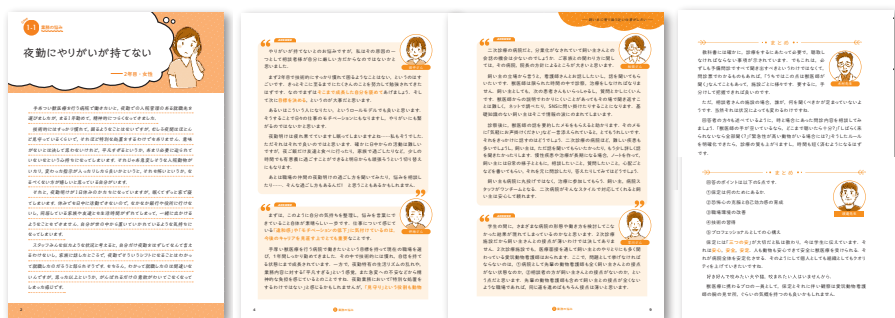
イラスト：いのぼん

愛玩動物看護師のための お悩み相談本です！

「夜勤が辛い」「急患を救えず無力感を覚える」「動物アレルギーになったかもしれない……」。本書では、愛玩動物看護師が現場で抱えるリアルな悩みに、動物看護の現場経験者や教育者など総勢12名+まとめ役2名が、それぞれの立場から回答します。「辞めたい」「しんどい」「このままでいいのかな……」。そんなときに一度立ち止まり、悩みを整理し、これからを考えるためのヒントが詰まった一冊。

CONTENTS

- 1 業務の悩み 2 心身の問題 3 自己研鑽の方法 4 技術習得の悩み
- 5 職場の人間関係 6 飼い主さんとの人間関係 7 雇用問題



A5判／2色刷り／144頁

定価 3,300円(税込)

愛玩動物看護師

動物病院実習お守りノート

著：木村祐哉

渡邊力生

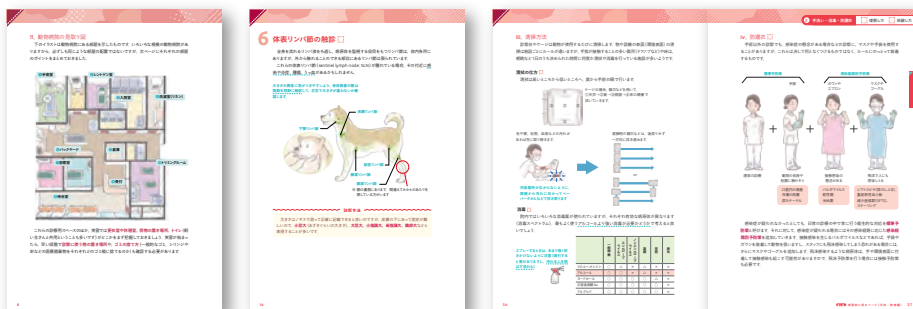
イラスト：いのぼん

愛玩動物看護師のための 実習補助ノート！

「動物病院とはどんな施設？」という基本から、実習前の準備、必要な手技・検査、形態機能学、代表的な疾患までをわかりやすく解説。現役の愛玩動物看護師が描いた豊富なイラストも充実し、事前学習にも実習中の確認にも役立ちます。書き込みながら学習の達成度や気づきを記録し、自分だけの「最強お守りノート」に仕上げられます。

CONTENTS

- 第1部 動物病院実習って何をするの？
- 第2部 実習前に見るページ（手技・検査編）
- 第3部 実習前に見るページ（形態機能・疾患編）
- 付録



愛玩動物看護師

動物病院実習お守りノート

著：木村祐哉
渡邊力生



A5判／オールカラー／192頁

定価 3,850円(税込)





一般社団法人

愛玩動物看護師の職能団体

日本愛玩動物看護師会

JVNA正会員のメリット

- 守る 正会員全加入の賠償責任保険(追加料金、手続き無し)
- 支える 一人で悩まないための顧問弁護士相談
- 伝える 農林水産省・環境省、動物看護関連団体からの情報提供
- 高め合う 会員限定配信セミナー、専門認定制度、動物看護研究発表の場

JVNA会員限定の
ラインナップ!
JVNA公式WEBサイト
で詳細を確認
<https://www.jvna.or.jp/>

JVNA会員専用サイト
スマートコアから
お申し込みください

JVNA・JSPAN (一社) 日本ペット栄養学会 共認定
「臨床栄養指導 認定愛玩動物看護師」認定試験

JVNA 臨床動物栄養学eラーニング講習

JVNA会員限定配信セミナー2026

9月15日から配信

愛玩動物看護師に知ってほしいお金のこと

大木 啓旨 氏 (株)VNKC ファイナンシャルプランナー/VNCA

第16回 動物看護大会

非会員の方も
参加できます!

12月6日(日)

<https://www.jvna.or.jp/16thkangotai/>

大阪ペピイ動物看護専門学校にて

参加申し込み・詳細!

今だから聞きたい動物看護

～聞けない疑問が、大切な看護への第一歩～



スタンプラリーも大好評!

- ◆動物看護研究 一般演題
口頭発表・ポスター発表
- ◆シンポジウム
往診獣医師協会・訪問動物看護研究会
- ◆愛玩動物看護師教育講演
- ◆災害動物看護研究会紹介
- ◆企業セミナー
- ◆愛玩動物看護師実習セミナー

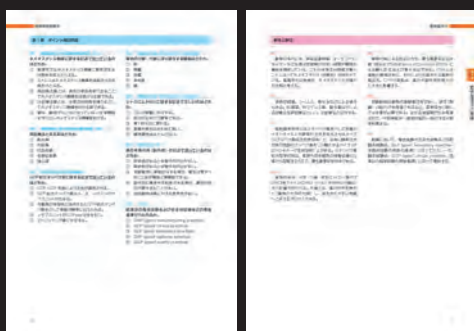
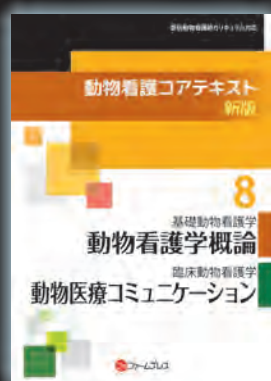
一般社団法人 日本愛玩動物看護師会

〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町3-27-3 ガーデンパークビル603

Tel: 03-5834-7758 Fax: 03-5834-7759 Email: jvna@jvna.or.jp

動物看護コアテキスト 新版

1科目ごとに選べる より学びやすく、使いやすく



ファームプレス®の

「動物看護コアテキスト」が

大きく変わります

全 6 巻に分類して収録していた科目を、**1 科目ごとに分冊** (一部 2 科目収録)、フレキシブルに選択していただけるようになりました。開きやすく、持ち運びやすいサイズで、学生の皆様の負担を軽減できます。愛玩動物看護師国家試験出題基準に対応し、各章に「**国家試験出題基準**」「**重要用語**」「**ポイント整理**」「**ポイント確認問題**」「**解答と確認**」を付記。

カリキュラム項目の理解を助け、**国家試験に向けて**の学習に役立ちます。

本シリーズの特長



国家試験に役立つ構成

豊富なポイント整理と練習問題で、国家試験対策に最適。



選べる 21 巻

1 科目ごとに分冊されているので、必要な科目を選択することが可能。



持ち運びやすいサイズ

開きやすく、持ち運びやすい軽さで日々の学習をサポート。

全 21 巻 項目

- | | | |
|---------------|---------------|--------------|
| 1 生命倫理・動物福祉 | 8 動物看護学概論 | 15 動物臨床看護学総論 |
| 2 動物形態機能学 | 動物医療コミュニケーション | 16 動物臨床看護学各論 |
| 3 動物繁殖学 | 9 動物病理学 | 17 動物臨床検査学 |
| 4 動物行動学 | 10 動物薬理学 | 18 愛玩動物学 |
| 5 動物栄養学 | 11 動物感染症学 | 19 人と動物の関係学 |
| 6 比較動物学 | 12 公衆衛生学 | 20 適正飼養指導論 |
| 7 動物看護関連法規 | 13 動物内科看護学 | 21 動物生活環境学 |
| 動物愛護・適正飼養関連法規 | 14 動物外科看護学 | ペット関連産業概論 |

詳細はお気軽にお問い合わせください

ファームプレス

〒169-0075

東京都新宿区高田馬場 2-4-11 KSE ビル 2F

電話 0120-411-149 FAX 03-5292-2726

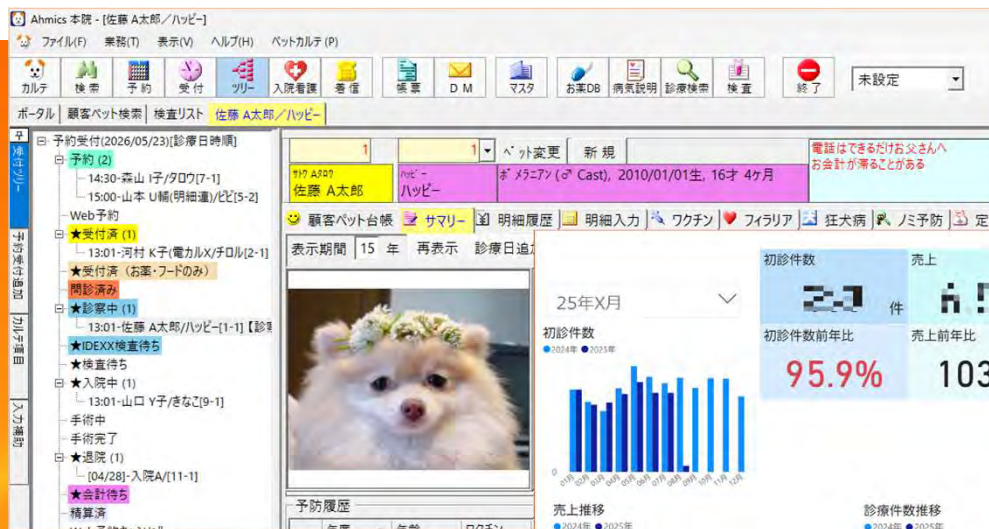
<https://www.pharm-p.com>



カルテ作成を もっと手軽に 簡単に

顧客管理
電子カルテ
ソフトウェア

AhmicsV4 Advance



12大学1200病院
以上の導入実績



便利な 基本機能

タブ表示

複数カルテを並行して編集可能！
マルチタスクで業務が倍速化◎

会計連動

電子カルテと会計がリンク！
カルテと会計の二重登録が不要！

入力補助

テンプレートやAI機能で
電子カルテ入力の時間を削減！
院内の診療の標準化にも！



Ahmics 経営ダッシュボード

※Cloudサービスのご契約が必須です

昨年比・年次推移を”ひと目で把握” 動物病院の経営判断を支援

Basicプラン

初診件数・売上・診療件数推移
診療分類/項目別推移

Standardプラン

担当医・動物種・年齢区分ごとの
売上分析

Premiumプラン

動物種・年齢区分ごとの再診率
待ち時間分析



Ahmics- Voice



獣医療向け 音声入力 システム

デジタル化・AI
導入補助金対象製品

顧客満足度と医療技術の向上を支援します

ペットコミュニケーションズ株式会社
PetCommunications





ヤマザキ学園は2027年、
創立60周年を迎えます。

動物看護教育のパイオニア ヤマザキ学園が養成する人材 国家資格「愛玩動物看護師」



ヤマザキ動物看護大学

Yamazaki University of Animal Health Technology



動物看護学部（4年制）

動物看護学科 / 動物人間関係学科

大学院（2年制）

動物看護学研究科 動物看護学専攻（修士課程）

📍 東京都八王子市南大沢 4-7-2 TEL.042-689-5254

ヤマザキ動物看護専門職短期大学

Yamazaki Professional College of Animal Health Technology



動物トータルケア学科（3年制）

動物トータルケア看護学専攻（1年制）

📍 東京都渋谷区松涛 2-3-10 TEL.03-3468-1101

ヤマザキ動物専門学校

Yamazaki Vocational College of Animal Health Technician



愛玩動物看護学科（3年制）

📍 東京都渋谷区松涛 2-16-5 TEL.03-5454-1001

●関連団体

特定非営利活動法人 **日本動物衛生看護師協会**
Japan Animal Health Technicians Association

《認定資格》

- ・AHT（アニマル・ヘルス・テクニシャン）
- ・CGS（キャット・グルーミング・スペシャリスト）
- ・CDT（コンパニオン・ドッグ・トレーナー）
- ・DGS（ドッグ・グルーミング・スペシャリスト）
- ・CRT（ケーナイン・リハビリテーション・セラピスト）
- ・VT（ベタリナリー・テクニシャン）



新人獣医師
愛玩動物看護師
の方へ



ROYAL CANIN
ACADEMY



オンライン
学習パートナー
ロイヤルカナンアカデミー

「もっと成長したい、でも時間がない…」
そんなあなたを支えます



こんな学習の「壁」に悩んでいませんか？

- 1 もっと知識を身に付けて、成長したい！
- 2 まとまって勉強する時間がない…
- 3 目の前の仕事をこなすので精一杯…



ロイヤルカナンアカデミー(RCA)登録により…

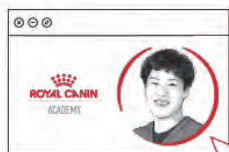
- 1 専門家から学ぶ、**現場直結の実践知識！**
- 2 スマホで30分～、**隙間時間で即学習！**
- 3 すぐ使える基礎知識が満載で、**業務効率up！**



100を超えるバラエティ豊かな
プログラムから最適なプランが選べます

獣医師
向けプラン

- ・臨床判断がスムーズに
- ・遭遇しやすい基礎的疾患



カリキュラム
皮膚科シリーズ



カリキュラム
消化管シリーズ

看護師
向けプラン

- ・基礎から無理なく学べる
- ・ペットオーナーへの説明力up



カリキュラム
栄養学基礎



ブリアン・モロー先生
LVT, VTS (NUTRITION)
カリキュラム
Vet Nurseのための
栄養指導実践コース

救急医療
向けプラン



カリキュラム
救急医療

ユーザー登録はこちら



<http://www.rc-academy.com/>

ロイヤルカナンアカデミーを
スマートフォンアプリで

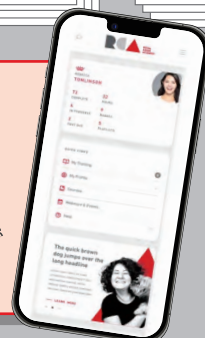
Coronstone
Galaxy



GET IT ON
Google Play

Download on the
App Store

- 1 App Store または Google Play から
「Cornerstone Galaxy」をインストール
- 2 アプリを起動し、ポータルネームに
MCVEと入力
- 3 登録しているメールアドレスとパスワードで
ログインアプリで学習をスタート



お問い合わせ先 / E-mail

ロイヤルカナンアカデミー事務局 rcacademy.vet@royalcanin.com



臨床に役立つ栄養学や
セミナー情報をお届け

＜動物病院専用
ロイヤルカナン公式LINE

第 35 回大会実行委員

大会長	佐伯 潤 (帝京科学大学)
事務局長	小野寺 温 (帝京科学大学)
事務局	渉外：小泉 亜希子 (帝京科学大学) プログラム：三好 哲平 (帝京科学大学) 総務：柳澤 綾 (帝京科学大学) 会計：川村 和美 (帝京科学大学) 広報・Web：永澤 巧 (帝京科学大学)
委員	彦野弘一 (帝京科学大学) 近藤保彦 (帝京科学大学) 山本和弘 (帝京科学大学) 加隈良枝 (帝京科学大学) 渡辺隆之 (帝京科学大学) 片山恵理子 (帝京科学大学) 深山俊治 (帝京科学大学) 阿部仁美 (帝京科学大学) 白石雅子 (帝京科学大学 附属動物病院) 村山真秀 (帝京科学大学 附属動物病院)

お断り：本誌に掲載された全ての記事内容は無断で複写・複製（コピー）・転載することを禁止します。

日本動物看護学会 第35回大会 抄録集

2026年9月12日発行

発行人 理事長 石岡克己

発行元 一般社団法人日本動物看護学会

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 6-23-4 桑野ビル 2F

TEL：03-6841-2643 E-mail：info@jsvn.gr.jp

HP：http://www.jsvn.gr.jp



帝京科学大学

いのちを まなぶ



東京西キャンパス

生命環境学部

アニマルサイエンス学科
動物看護科学コース
アニマルサイエンスコース
アニマルセラピーコース
野生動物コース

生命科学科
生命コース
自然環境学科

千住キャンパス

生命環境学部

アニマルサイエンス学科
動物看護福祉コース

生命科学科
生命・健康コース
臨床工学コース
自然環境学科



- 公式HP -

